

志賀和民（しが・かずたみ）

東京出身。東北大学大学院修了後、日揮（株）入社。シンガポールを皮切りに海外勤務を歴任。1989 年日揮関連会社社長に就任しフィリピンに移住。

2007 年 4 月 PASCO（サロン・デ・パスコ）取締役。

フィリピンではどんな子育てをしているのか？(2014-4-18)

フィリピン在住 17 年。元フィリピン退職庁（PRA）ジャパンデスクで、現在は「退職者のためのなんでも相談所」を運営。志賀さんはひょんなことからフィリピンの大家族と同居し、「ダダ（おじいちゃん）」と呼ばれるようになった。

毎週土曜日、恒例の KIAN（私のビジネスパートナー、ママ・ジェーンの息子）とのランチで、突然、「ダダはガールフレンドがいるか？」と聞かれた。そのとき KIAN を無視して、私が携帯のテキスト（携帯メール）に熱中していたためだ。私のメールの相手はお客だが、KIAN ならテキストメール＝ガールフレンドなのだ。

以前、ママ・ジェーンの兄アランがしばらく我が家に居候していた。アランがテキストしている（携帯メールを送ろうとしている）のを見て、KIAN が「誰に送るのか」と聞くと、アランは正直に「ガールフレンド」と答えた。

KIAN のもう一人の伯父さんボボイも、携帯を離さず、いつもテキストしている。失業中の彼らは他にやることもないから、ガールフレンドと一緒になければ殆ど一日中テキストで会話している。

携帯電話会社各社は、同じキャリア同士なら 1 日 10 ペソ（約 20 円）で無制限（Unlimited＝アンリ）のテキスト、25 ペソ（約 50 円）で無制限の通話ができるサービスを提供している（スマートフォンの場合）。だから 1 日中、テキストできるのだ。

ママ・ジェーンも、殆どの時間を携帯とにらめっこしている。彼女は 아이폰 派なので、テキストだけでなく E-mail や Facebook 更に新聞などを読むのにも使用している。（事務所兼住居の我が家は、複数のパソコンでインターネット利用ができる Wifi 環境が整っている。）

ジェーンは友人またはパパ・カーネルとテキストすることもあるが、時には私にも大量のテキストを送付してくる。たとえ二人が家にいても、1 階と 2 階でテキストを交換する。

私にガールフレンドがいるという話は、KIAN からジェーンにも伝わっていた。「KIAN がお腹がすいているのに、ダダ（おじいちゃん＝私のこと）はガールフレンドにテキストを送るのに夢中だった」と報告したそう。

さらにパパ・カーネルには、「マミーはスマホとにらめっこで、ちっともかまってくれない」と小言を言ったそう。ちなみに 17 歳のキム（パパ・カーネルの連れ子）は携帯所有や Facebook 利用を禁止されている。娘に言い寄る害虫から娘を守るための親の算段である。

フィリピーノのテキストの会話は「How are you? Did you finish your lunch? What are you doing? I miss you. etc」など、たわいもない。私の運転手をしているボボイと出かけ

ると、10分おきくらいに携帯にテキストが入る。

運転中は携帯使用を禁止しているが、私を待っている間は自由だから、そのときに用事は済ませているはずだ。それなのに何故、運転中にも絶え間なくテキストが入るのか不思議でならない。

こんな調子では、相手も仕事をしてとは思えない。「私はくだらないテキストは嫌いで、そんなものには返事しない」とヤヤ（KIANの乳母）に話すと、「だからガールフレンドができないのよ」と諭された。

母親の度を越えた躾(しつけ)に誰が歯止めをかけるか?

最近ママ・ジェーンの KIAN へのしつけが度を越えている。箸の上げ下げにまで口を出すといった感じで、その指示も声を荒げ、心に針を突き刺すような調子で責める。挙句の果て「ママの言うことが聞けないの」「ママを愛していないの」といった日本でもなじみの決まりの文句だ。

日本ではいじめや登校拒否、引きこもり、リストカットなどが社会問題になっているが、フィリピンでは幸いなことに、殆ど取り沙汰されることはない。

最近読んだ日本の本で、カウンセリングをしている牧師が、「こうした社会現象は病んだ子ども・若者の心に原因がある」と語っていた。親の過剰な干渉、期待、ストレス（子どもを、自分のストレスの捌け口にする現象）のため、子どもたちは親の叱責は自分の責任であり、親の期待に応えようと自分を責め、果ては自分を見失ってしまうという。

まさに目の前でママ・ジェーンのやっていることがそれだと思って話しても、聞く耳を持たない。自分が母親から受けた教育が正しいと信じ込んでいる。この辺の事情は日本とまったく同じだ。

こんなことでは、伸び伸びと育ってきた KIAN が親や人目を気にし、自分の判断で行動できないくだらぬ木偶(でく)の棒に育ってしまうと、カーネルの目前でジェーンを諭した。ジェーンは耳が痛いのか、殆ど聞こえない振りをしていたが、とりあえずは十分だと判断して話をやめた。

KIAN は夜、いつも私の部屋（3階）で他の子どもたちと時間を過ごす。夜も遅くなり、ジェーンが「下に降りて来なさい」と2階から声をかけた。ママ・ジェーンの命令は絶対だから、キムも双子（ジェーンの姪）もあわてて KIAN を2階に戻そうとする。

KIAN は私に背負われて階段を下りるのが好きだから、私の後ろに回っておんぶを催促する。2階のママの部屋に入っても KIAN は私の手を掴んで離そうとしない。パパ・カーネルもいるので、私が遠慮して部屋から出ようとする、KIAN は泣き出してしまった。

ママ・ジェーンが「そんなにダダがよければ3階に行きなさい」と言うので、再び私の部屋に行ったが、ママ・ジェーンが怖い KIAN はやっぱり戻ると言って、私に背負われて2階に降りた。

しかし、KIAN がママとパパの部屋に戻ってから大騒ぎになってしまった。ママの命令と、私の部屋で遊んでいたいという気持ちの狭間で KIAN はパニックとなり、大

声で泣き続けた。そして「Mommy said go down」と、泣きながらママを責めた。

こんな光景を目の当たりにして、いかにママの命令が KIAN の負担・トラウマになっているか、このままでは KIAN の人格が破壊されてしまうと危機感を覚えたのは私ばかりではなく、カーネルも同様だろう。

この数日後、さすがにジェーンも白旗をあげた。パパ・カーネルもジェーンに注意したそうで、当面ジェーン旋風は収まりそうだ。

核家族で、しかもパパがほとんど家にいない日本の多くの家庭ではママの暴走に歯止めがかからず、子どもたちの人格が破壊されていく。そしてこれが、子どもたちを巻き込む様々な社会現象を呼び起こしている。

フィリピンのエリートはどのような大学で学んでいるのか？(2014-4-7)

----フィリピン名門大学事情----

退職者の方が入院している関係で、サント・トマス大学 (University of Santo Tomas, UST) を訪れる機会があった。UST は 1611 年設立のアジア最古の大学で、4 万 2000 人の学生を擁するフィリピン最大の大学である。マニラ市内の繁華な場所にある。約 25 ヘクタール (7 万 5000 坪) のゆったりしたキャンパスは、学生であふれている。

UST 出身者には、ケソン、オスメニア、ローレル、マカパガル (アロヨ前大統領のお父さん) などフィリピン共和国の初期の大統領の名が連なる。ケソン大統領はケソン・シティの由来でもある。ちなみにローレル大統領は日本によるフィリピン占領時の傀儡政権で、今では歴史から抹消され道路などの名前にもないので、めったに耳にすることはない。英雄ホセ・リサルはここでも学んでいる (彼は 3 つの大学を出ているそうだ)。

フィリピンナンバーワン大学は国立フィリピン大学

フィリピンで NO.1 (ナンバーワン) 大学は国立フィリピン大学 (University of the Philippines=UP) で、フィリピン国内に 10 校を有し学生総数は 5 万人を超えるが、単独の大学としては UST に席を譲る。

ケソンシティに 500 ヘクタール (150 万坪) 近い広大なキャンパスを構える UP Diliman 校は旗艦大学として 2 万 5000 人の学生を擁し、幾多の国家的指導者を輩出してきた。

フィリピン歴史に名を残す第 10 代大統領マルコスを筆頭に、マニラの大通りの名前でおなじみの Roxas (ロハス)、Quirino (キリノ) は第 5 代と 6 代の大統領、現在の副大統領 Binay (ビニャイ) も UP の出身だ。UP の学生は国家や社会の指導層たるべく育てられたエリートの集合体で、その誇りと自信は並々ならぬものがある。なんでも一番にならねば気が済まず、組織の中でトップになれなければサッサとやめてしまう。UP 出身者なら、ある程度経験を積みばいくらでも転職先はある。

フィリピン大学出身の優秀な人材はすぐに転職してしまう

私が日系企業現地法人の社長だった頃、毎日のように新入社員の面接を行なった。

日本のように決まった時期の一斉入社ではなく、一年中、新入社員を迎えていた。入社試験では UP の学生はよくできる。面接でも実にしっかりしているから雇入れる。しかし 2 年から 3 年で、ある程度仕事の段取りを吸収すると、もっと給与の高い出世の可能性が大きい会社にさっさと移ってしまう。

この悩みを地元の大手建設会社の副社長に打ち明けた。彼は笑いながら、「うちでは決して UP の学生を雇わない。組織のトップになれないと悟ると、彼らはさっさとやめる。うちの会社には UP 出身者は 2 人しかいない。それは社長と俺だ」といわれた。そんな訳で、入社試験の成績だけでは駄目で、会社にどれだけ貢献できるかという尺度で雇うことになった。だがフィリピン人社員に会社への忠誠心を求めるのは容易でない。

私立の雄アテネオ大学は授業料が並外れて高い

国立の雄 UP の向こうを張るのが、私立の雄アテネオ大学だ。UP に隣接するキャンパスは 100 ヘクタール（30 万坪）を超え、充実した施設を誇る。空からしか見たことはないが、近隣の街並みと大差ない UP のキャンパスとは大違いだ。それもそのはずで、アテネオの授業料は並外れて高い。（年間数十万ペソ、50 万から 100 万円程度だがフィリピンでは並外れている。）だからアテネオの学生は、血筋も頭もよい金持ちのお坊ちゃま、お嬢様で占められる。アテネオと聞けば「スマート（利巧）でマヤマン（金持ち）」というのが第一印象で、UP と聞けば「スマートだがマヤバン（生意気）」となる。

アテネオ出身者の代表は、現在の大統領のアキノだ。前大統領のアロヨ、元大統領のエストラダ、あるいは英雄ホセ・リサルもここで学んだ。それに次期大統領と思われるクリス・アキノ（女優）は主席でここを卒業したと言われる。

彼女は 2000 年前後のフィリピン NO.1 の人気女優で、マルコス時代に暗殺されたノイ・アキノとその遺志を継いだ妻のコーリー・アキノ元大統領の血を引き、兄は現大統領という家柄で、富と名声に美貌をあわせ持つ。クリス・アキノが政治家としての経験を積み、大統領選に打って出れば間違いなく当選するだろう。現大統領のノイ・アキノはクリス・アキノの強烈な後押しがあったから大統領に当選した。

3 番手デ・ラサルはお金持ちが行く学校

フィリピンの大学で 3 番手に位置するのがデ・ラサルだ。函館ラサルや鹿児島ラサルなどの中学・高校と根っこは一緒だが、フィリピンでは大学で、多くの付属校を有する有名な大学だ。ここも金持ちの行く学校で、ラサルと聞くと「マヤマン（金持ち）」という印象で、必ずしも「スマート（利巧）」とは思われていない。しかしビジネスマンの子弟が多く通っているから、将来のビジネスのコネを作るには格好の学校だ。ちなみにフィリピン No.1 の SM デパートを率いるヘンリー・シーはこの出身だ。

マニラ首都圏の有名校には、上記の他、工科系として UP の向こうを張り優秀な学生を輩出しているマプアがある。マプア出身の化学工学畑の学生を雇ったことがあるが、その後、国家資格試験で全国第 2 位の成績をとった。そして地道にこつこつと仕事をこなし、最後には UP 出身の社員を尻目に、部門のトップにまで上り詰めた。他

にもマプア出身で、国家資格試験で第 1 位をとった社員がいたが、人格と英知に優れた尊敬に値する人物だった。

地方にも優秀な大学がある。学生の街ドマゲッティ市（ネグロス島の南端）にはシリマン大学、高原の街バギオにはセント・ルイス大学、ミンダナオのイリガン市にはミンダナオ州立大学など。フィリピンは学生が人生を謳歌する国だが、国内の就職戦線は厳しく、少しでも経験を積んで海外を目指す学生が多い。従って国内の人材の空洞化が甚だしいが、いつか国内の産業が勃興し、海外の人材がフィリピンに U ターンすれば、とんでもない技術大国が出現するだろう。

我が家の禁酒令(2014-3-26)

＜愛飲家と愛煙家にとっての天国＞フィリピンも今は昔

ビジネス・マネージメント専攻のママ・ジェーンは、私の長年のビジネスパートナーで、国家警察の幹部パパ・カーネルとの間に一人息子 KIAN（もうすぐ 4 歳）がいる。ジェーンの家にはパパ・カーネルの連れ子キム（17 歳の女の子）とジェーンの姪の双子（8 歳の女の子）が同居し、さらにジェーンの弟、ヤヤ（子守）が加わり大家族で暮らしている。私はそのジェーン一家で「ダダ」と呼ばれ、おじいちゃんのような役回りを演じている。

最近、そのママ・ジェーンから「KIAN の前でビールを飲んではいけない」というおふれが出た。これは一大事。私の人生最大の楽しみを奪うつもりかと反発したが、敵も頑なに主張して、パパ・カーネルのきついお達しだともいう。

フィリピーノに秘密はない？

私の日々の楽しみは KIAN と一緒に食事をとることで、そのときのビールが堪らなくおいしい。夜は食事中サンミゲル・ビールの小瓶 2 本、そのあと寝るまでに 2 本と、1 日だいたい 4 本空ける。最近はランチでも 1 ～ 2 本飲み、少々度が過ぎているかなと思わぬこともない。

しかし、減らせというのならまだしも「食事中に飲んではいけない」というのは辛い。ママ・ジェーンは「もし飲めば KIAN と一緒に食事させない」と言い張る。KIAN も母親に洗脳され、私がビールを飲むかどうか見張っている。

先日、ママ・ジェーンがいないので、ヤヤもキムも私にビールを飲むことを勧めた。鬼のいぬまの洗濯。ヤヤは KIAN に「Secret 秘密」と言い聞かせた。KIAN はわからないような顔をして「Secret?」と繰り返した。

そのとき、ママ・ジェーンがちょうど帰ってきた。KIAN はママ・ジェーンのところに飛んでいき「ダダ（私）がビールを飲んだ」と言いつけた。

「フィリピーノに秘密はない。皆に知ってほしければ、＜秘密ね＞と付け加えれば、あっという間に広がる」といわれる。KIAN は 3 歳でそんな意識を持ちあわせているのだろうか？

フィリピン人が酒を飲むのは特別な日

ことの発端は、先日 KIAN がパパ・カーネルに向かって「パパもビールを飲め。ダダのように強くなるから」と進言したことだ。ジェーンは「ダダは KIAN のアイドルだから、ダダのやることは何でも正しいと思っている。3 歳から酒を礼賛するようで

は先が思いやられる」と、カーネルがとても心配しているという。

そもそもフィリピン人で普段から酒を呑む人はあまりいない。酒を飲むのは誕生日などのパーティだけで、食後に飲み始め夜がふけるまで飲み続ける。要は晩酌という習慣はない。酒を飲むときは外出して、それなりのところで飲んでいるようだが、もしかしたらこれは皆、恐妻家だからかもしれない。女性が食事中に外で飲んでいるのは見たことがない。普段からビールを飲むのはビア・ハウスの GRO（ホステス）くらいかもしれない。

私はもともと瓶入りのサンミゲル・ビールを飲んでいたが、ビール瓶が爆発し国家警察の警官が歩けなくなる大怪我をした事件が起きた。その情報が伝わるや、我が家では瓶ビールが禁止となり缶ビールに変更された。缶ビールはサリサリ（小売店）には売っていない。セブンイレブンかスーパーで買うしかない。これで 22～23 ペソ（約 50 円）で買えるものが一気に 40 ペソ（約 90 円）になってしまった。今回はその缶ビールさえも禁止となった。

禁酒は KIAN との食事中だけの話で、食後は自由だが、一滴の酒も受け付けないママ・ジェーンは、食前の一杯が格別だということを知らない。

ちなみにジョルビーやマクドナルドなどのファストフード系では一切アルコールを出さない。一方「ビア・ハウス」と呼ばれる庶民の遊びどころは、専らビールしか出さない。しかもそのビールが 40～50 ペソ（約 90～115 円）程度と格安で飲めて、男性客を呼び寄せる売りになっている。

高級ナイトクラブ、ベイ・エンターテイメントでさえ、ビールは 110 ペソ（約 250 円）だ。GRO のレディーズ・ドリンクもビール（どういうわけかサンミゲル・ライト）のみで、だからビア・ハウスの GRO は皆ビール腹だ（ただし GRO が飲むビール 200 ペソ＝約 460 円程度）。ビール＝ビアハウス＝GRO という連想が働き、世の女性軍はビールを敵視するのではないかと疑いたくなる。

ビールなしの食事も、やってみればどうということはなく、代わりに氷入りの冷たい水を飲んでいる。我が家はだいぶ前から禁煙で、仕方なくサリサリ・ストアでタバコの一本買いをして外で吸っている。おまけにビールも隠れて飲まなければならなくなり肩身がせまい。

内心「健康のためにはよかろう」と我が家の新ルールに従っているが、愛飲家と愛煙家にとって天国だったフィリピンも、そうとばかりは言っていられないようだ。

家族は一緒に寝るのがフィリピン流(2014-3-18)

昨年の話だが、PRA（フィリピン退職者庁）のノエル営業部長（女性）と部下のマービン課長（男性）が、東京ビッグサイトで举行される「ロングステイフェア」参加の為、安いホテルを探していた。

私はビジネスホテルの部屋をロングステイ財団から提供してもらったが、ツインがコーポレートレートで 1 万 4 千円だった。それを彼らに話すと、ツインを二人で利用すれば予算内に納まるので、そこを予約したいとのことだった。

上司の女性と部下の男性が一緒に部屋に泊まるのだという。吃驚して日本ならスキャンダルになると話すと、自分たちは家族のように親しいから大丈夫だという。

逆説的だが、男女が同じ部屋で寝ても、親しい間柄ならフィリピンではスキャンダルでもなんでもない。

家族のように親しい間柄なら、一緒に寝ても問題なし！

一昨日の夜、私の仕事のパートナーのジェーン（女性）と息子の KIAN と一緒に、17 歳のキム（KIAN の腹違いのお姉さん）が、私の部屋で寝ると言い出して吃驚した。理由を聞くと、自分たちの部屋がペンキ塗り立てで、臭くて寝ることができないとのこと。

ジェーンは国家警察勤務の旦那がジャカルタ出張中で、その間、妻が他の男（私）の部屋で寝るなんて、日本なら夫婦喧嘩では済まない。しかしフィリピンでは、家族のように親しい間柄の人間が一緒に寝ても、何の問題も抵抗もない。

最近、キムと KIAN が私の部屋で DVD のアニメを見ながら寝込んでしまうことがよくある。花も恥らう 17 歳の年頃の娘が私のベッドに寝ているのにはいささか抵抗を覚えるが、本人はなんともない。やめるよう説教すれば、逆に私が下心を抱いているように言い出せない。

ちなみに私の部屋のテレビは USB が使えるので、USB メモリーに KIAN の好きなアニメをたくさん保存して、それを見て楽しんでいる。

「皆と寄り添って寝るのがうれしいの」

国家警察幹部の重責を担うジェーンの旦那、カーネル（大佐）はいつも未明の帰宅だ。たまに 2～3 日帰ってこないこともある。その後帰宅すると 24 時間、部屋に閉じこもって寝ている。それでも KIAN はお構いなしに同じ部屋で大騒ぎをする。これではカーネルも寝ているところではない。

それなら KIAN を別の部屋で寝かせれば良いとアドバイスしたが、ジェーンは「とんでもない」と相手にしない。家族はいつも一緒に寝るのが当たり前で、その原則が最優先なのだ。

カーネルは周りでどんなに KIAN が騒いでいても文句一つ言わず、静かに目を閉じている。

タバコ農場に帰ると、ジェーンは母親や甥姪と農場のファームハウスのゲストルームの一室に寄り集まって寝る。総勢 20 名程度に及ぶこともあるので、「別の部屋に分散して寝てはどうか」と言っても、「皆と寄り添って寝るのがうれしい」と耳を貸さない。家族と一緒に寝て、家族の絆を確かめ、幸せを味わっている。

フィリピンでは小さな家に大勢で暮らしているから、家族一同が狭い部屋にごろ寝せざるをえないのかと思っていたが、それだけではないようだ。

夫婦でツインベットはあり得ない！

私は最初の子どもができたとき、夜泣きに耐えられず別室で寝ることにした。それ以来、夫婦別室が定常化して今に至っているが、確かに家族の絆というような思いはどこかへ置き忘れてきてしまったような気もする。

商売柄、日本からフィリピンに来る退職者のホテルの予約をすることが多いが、殆どの夫婦はツインベットを希望する。しかしフィリピン人夫婦は、たとえ 60～70 歳になっても一つのベッドに抱き合って寝るのが普通だ。「別のベッドで寝よう」などと言い出したら、離婚に発展してしまいかねない。

人類 700 万年、動物の時代も入れると数億年の間、家族はねぐらあるいは巣で身を寄せあって一緒に寝るのが当たり前だった。お互いの体温を感じる距離で寒さや飢えをしのぎ、災害や敵から身を守ってきた。それが家族というものなのだろう。

核家族が当たり前になり、無縁社会が定番化している現在の日本に、体温を感じあう家族は果たしてありうるのだろうか。

フィリピンの退職者ビザ制度を使ってコンドミニアムを購入(2014-3-7) 日本人退職者のトラブル事例

フィリピンの特別居住退職者ビザを取得できる「SRRV クラシック・プログラム」では、35 歳以上 50 歳未満の場合 5 万ドル（約 500 万円）、50 歳以上の場合 2 万ドル（約 200 万円）を定期預金してビザを取得した場合、その預託金をフィリピン国内のコンドミニアム（Condominium 共有地）購入代金に転用することが認められている。

だが現実には、預託金を引き出す段になって、コンドミニアムの開発業者が PRA（フィリピン退職者庁）の要求する書類を用意できないというトラブルが発生している。

退職者保護のために退職庁が課している条件とは？

PRA は退職者の保護のために下記の条件を開発業者に課しているが、この条件を開発業者がクリアできない。

- 1) 売り手名義で個々のコンドミニアム・ユニットのタイトル（CCT / 登記）が存在すること
- 2) 180 日以内にタイトル（CCT）を買い手名義に変更するとともに、PRA の許可なしに勝手に売買できない趣旨の裏書をする

PRA はまた、「購入の対象となるコンドミニアムは価格が 5 万ドル（約 500 万円）以上で、かつ居住可能であること」という条件も課している。「居住可能」の意味は、物理的にコンドミニアムが完成しているとともに、タイトル（CCT）が売り手名義で存在しているということ。

新規開発のコンドミニアムでは、完成後タイトル（CCT）発行の手続きが開始される。従って、コンドミニアムが完成しているというだけでは PRA 定義の「居住可能」とはみなされない。PRA は、ユニットのタイトル（CCT）を 180 日以内に退職者名義に書き換えるという覚書（Undertaking）の提出を求めているが、種々の事情で開発業者がそれに対応できない場合がある。

一方、未完成のコンドミニアム（Pre-Selling）でタイトル（CCT）が存在しなくても、そのプロジェクトが PRA に認定（Accredit）されている場合に限り、預託金の転用が認められる。PRA は開発業者から履行保証書（Performance Bond）などの提出を求め、退職者が安全に購入できることを確認し認定する。

従って、退職者が預託金を使用しコンドミニアムを購入する場合、事前に PRA に相談し物件に適用可能かどうか（タイトル CCT が存在するか、PRA の認定物件か）を確認する必要がある。

開発業者（あるいはエージェント）は、タイトル（CCT）の不在やその他の不利な条件を明らかにせず、売らんかなの姿勢で迫る。これでは契約後、いざ PRA に書類を提出する段になって、開発業者がいつまでも書類をそろえず、時間を浪費することになりかねない。支払い済みの予約金や契約金の一部が宙に浮いてしまうことさえある。

退職者が経験しやすいコンドミニアム購入トラブル

【事例 1】支払いは完了。しかし今だ預託金は引き出せず

退職者の Aさんは、マカティの一等地に建設された財閥系開発業者から、約 600 万ペソ（約 1500 万円）で 60 平米ユニットを購入することにした。ユニットはすでに完成しており「居住可能」だと思った。支払い条件は 100 万ペソ（約 250 万円）を 6 回で、最後の 2 回分（約 500 万円）の支払いに PRA 預託金（5 万ドル）を使用するつもりだった。予約金は即刻支払った。

Aさんは当初からエージェントに PRA 預託金利用の旨を伝え、PRA 要求の書類を用意するよう指示した。しかし、エージェントの書類提出作業は一向に進まない。2 カ月が経過し、2 回目の支払いを行なった。

Aさんが PRA への提出書類発行を強く迫ったところ、エージェントは初めて、PRA の要求する書類、すなわちタイトル（CCT）やその移動（180 日以内）覚書を発行できないと言い出した。

しかしすでに売買契約書の署名を行ない、2 回分で 200 万ペソ（約 500 万円）の支払いも終わっており後の祭り。開発業者・エージェントは Aさんから支払いが行なわれるまで、この事実をひた隠しにしていた。

Aさんは、仕方なく支払いを続け、すでに全額を支払い、ユニットの引き渡しも終わった。そこで PRA に 5 万ドル（約 500 万円）の引き出し許可を要求したが、PRA も規則外の状況に於ける引き出し許可発行に頭を痛めている。

開発業者が PRA の要求に添えないのは、コンドミニアムは完成しているものの土地の名義が関連会社のもので、その移動に難航しているため。税金の問題も絡んでいる。開発業者は他人の土地に建てたコンドミニアムを売却したわけで、厳密には違法行為といえる。

PRA は「そういうことが起きないように色々と規則を設けているのだから、是非、事前に相談してほしい」と強調している。

【事例 2】PRA 認定外物件を売りつけられそうに……

退職者の Bさんは、居住可能のユニットを大手開発業者から購入することに決め、エージェントに残りの手続きを依頼して帰国した。

PRA とも事前に相談し、予約金を支払い前に PRA 要求の書類提出を求めた。二三日あれば書類は準備できると開発業者は豪語していた。それが 1 カ月経っても音沙汰が

ない。挙句のはてに「件のユニットは他に売却したので別のユニットを購入してほしい」と通知してきた。予約金を支払っていないので、強く文句も言えない。

しばらくして、今度は「書類の準備は正式に予約が済んだ後でないとできない」と言い出した。「まずは予約金を支払う」というのは確かに道理なので、Bさんは予約金を支払った。

するとエージェントは、要求された書類の殆どは PRA に提出済みだと言って、Pre-Selling（未完成物件）用書類にサインするよう Bさんに求めてきた。

PRA に確認に行くと、確かにその開発業者の物件で認定されているプロジェクトはあるが、Bさんがサインを求められた物件は認定の対象外とのこと。PRA からそのことを伝えてもらおうと、エージェントは前の書類は撤回して新規の書類を送付すると伝えてきた。

次にエージェントは、「PRA への書類提出は開発業者がやるから、PRA への申請書だけに署名しろ」と言う。PRA が要求する書類を揃えられない事情があるようだが、Bさんは物件購入を決意しすでに半年近く経過しており、いい加減うんざりしている。開発業者からは書類の準備の遅れを棚に上げ、契約金の支払いが遅れていると文句を言われ、踏んだり蹴ったり。

新規物件を購入する場合、「居住可能」という言葉に惑わされず、タイトルを即刻提示できるものか、あるいは PRA 認定の新規物件を購入すべきだ。中古物件ですでにタイトルが存在する物件も間違いない。ただし中古物件の場合、タイトル移動の手続きや売買・登記に伴う税金の支払いを買い手が行ない、タイトル移動のトラブルを避けるという注意が肝心だ。

フィリピーノはふりかけが大好き (2014-2-28)

我が家の日本食保管のキャビネットは、ややもすると長く放置され、食材が賞味期限切れになっていることが多発する。炊事役のヤヤ（メイド）はそれが何であるかわからないから、私自身が食卓に出さないことには目の目を見ることがない。

キャビネットに眠っていた子ども用ふりかけが大人気！

先日、たまたま日本食キャビネットを開けてみると、二三年前しまったまま湿気てしまった海苔が大量に出てきた。賞味期限切れどころか腐敗している恐れもあるので廃棄したが、そのとき見つけたのが、ディズニーのキャラを使った永谷園の子ども用ふりかけだ。

誰かに頂いたものだが、封も開けずに放置されていた。賞味期限は若干過ぎていたが、乾物だし二重に封もしてあるので、よかろうと子どもたちに振舞った。そうしたら、「おいしい」と皆が目を丸くしていた。

ふりかけがフィリピン人の好物だということは以前から認識していたものの、すっかり失念していた。魚や卵、海苔やゴマなどが原料だから、健康に悪いはずはない。野菜嫌いの子どもたちには絶好の栄養補給になりそうだ。

フィリピンの子どもたちは、ご飯が主食で副食でもある。ご飯におかずのソースをかけて味をつけ食べるのが普通で、他にはなにもいらなくらいだ。KIAN（仕事の相棒ジェーンの息子で今年幼稚園入学）もご飯にポン酢をかけて食べるのが定番で、お

かずがなくともケチャップや醤油があれば何とかなる。そんな食習慣にふりかけはびったりで、醤油に比べれば余程ましだ。

食卓の定番になるには、低価格と小口販売がカギ？

翌日、すでに 20 袋入りのパックがなくなっていた。これはあまりにと思ったら、一緒に住んでいる子どもが学校に持って行って、皆に自慢したらしい。友だちも喜んで食べていたとのこと。

これはいけると思って、さっそく日本食材店で探してみた。すると丸美屋と永谷園のふりかけが置いてあった。20 袋入りで 150 ペソ（約 340 円）、1 袋 7.5 ペソ（17 円）は高い。日本で買えば 150 円、フィリピンでつくれば 50 円くらいまで値段は下がるだろう。庶民の食卓の定番となるのは間違いない。

そんなわけで海苔とふりかけが毎回、我が家の食卓を飾ることになった。朝食は納豆と地鶏の生卵とご飯が半カップ、それにわかめと豆腐の味噌汁、たくあんと梅干少々、という私のメニューにも色を添えることになった。

その影響で KIAN の食事味噌汁と納豆にご飯、それにふりかけと海苔という、まるで日本の子どものようになっている。普段はホットドッグにご飯だけという食事なので、それよりは十分ましだろう。

一方、すでにフィリピン庶民に定着しているのが、日本であまり見られなくなったお椀のマークの味の素だ。フィリピンでは欠かせない調味料だ。はじめはビン入りだったが、あまり売れず、小口のパックにすると飛ぶように売れ出した。小が 5 ペソ（約 12.5 円）、大が 10 ペソ（約 25 円）。1 回の料理に必要な分だけ入っているのも、その日暮らしの庶民の味方となり、塩、胡椒、砂糖、調理オイルなどとともにサリサリ（街の小売店）の定番商品になっている。

ふりかけも、1 袋ずつ小口で売ることが成功の秘訣だろう。

年金や健康保険でメタボの日本と、老人ホームや介護施設不要のフィリピン (2014-2-21)

日本では予備軍も含め 800 万人の認知症のお年寄りがいるという。彼らの多くが、一人あるいは夫婦だけの暮らしだ。まわりを見渡しても、子ども夫婦と一緒に暮らすお年寄りほとんどいない。お年寄りは皆、口をそろえて「子どもたちに面倒はかけたくない」と話す。そして子どもたちも将来、親の面倒を見るという気はない。

しかしいざ親が認知症など介護を必要とするときは、放っておくわけにもいかない。特別養護老人ホーム（特養）は 40 万人の入居待ちで、私設の有料老人ホームも一般人には高嶺の花だ。

そうなると介護のため会社を辞めたり、離婚して親の介護に専念したり、自分の家族を犠牲にせざるを得ないことになる。だからお年寄りはますます子どもに面倒をかけまいと、一人住まいや介護拒否が加速する。そして最終局面では、面倒を見るほうも見られるほうも地獄を見ることになる。

日本は戦後、年金、健康保険、介護保険、生活保護など社会福祉の充実にまい進してきた。しかし、本格的な少子高齢化社会の到来で膨大な国家予算をつぎ込むことに

なり、破綻は秒読み段階だ。日本はそれぞれの福祉制度に、フィリピンの国家予算をはるかに超える予算を割り当てている。しかもそれは、国債などの借金で賄われている。

政党は票集めのため社会福祉の充実を旗印にしているが、現実には年金支給開始年齢の引き上げ、個人負担の増額、在宅介護の奨励などコスト削減にやっきだ。このままでは膨大な国家の負債により財政、そして国が破綻してしまう。

しかし手厚い福祉制度に胡坐をかいて、核家族化と無縁社会をまい進してきた日本人は、国家の福祉に頼らざるをえない体質（メタボ社会）になってしまっている。

介護問題の解決策を海外に探る日本 介護問題のないフィリピン

先般お世話したお年寄りはずでに軽度の認知症で、高齢の奥さんにとり介護は過酷で、精神状態までおかしくなりかねぬ切羽詰った状態だった。お子さんにはそれぞれの生活があり、介護の手助けもできない。特養に入れようにも、この程度の認知症では対象外と門前払いされ、申し込みもできなかった。私設の老人ホームでは財政的に子どもたちの生活が破壊される。

フィリピンでの介護を解決策として考え、外国人の面倒を専門に見ている **Wellness Place** という所に父親を預けた。月々 10 数万円の費用で、これならなんとか賄える。

これで家族崩壊の危機を乗り越えることができたが、この選択は海外居住の息子さんあってのことだ。今後、介護老人を抱える家庭は国を頼りにせず、日本を脱出して自ら解決策を海外に探る以外に方法がないかもしれない。

一方、フィリピンには老人介護の問題も少子化の悩みもない。国民の半数が貧困という社会だが、老人と子どもは強い家族の絆に守られ幸せに暮らしている。介護施設も皆無で、自分の親を介護施設に送り込む不謹慎な子どもはいない。フィリピンでは老人と子どもは神の子で、天使なのだ。

それでは、日本のお年寄りはなぜ子どもに面倒を見てもらうことを拒否し、一人暮らしをするのだろうか。財政的に可能だから一人暮らしをするのだ。お金さえあれば、色々と面倒な家族などいないほうが気楽かもしれない。嫁姑の確執もないし、夫婦の揉め事も、兄弟や子どもが持ち込むトラブルに悩まされることもない。

財政的裏づけとは社会福祉の目玉、年金だ。年金さえあれば、子どもを頼りにしなくても老後の暮らしが送れる。老いて子に従う必要もなく、好きな時だけ土産を持って孫の顔を見に行けばよい。年金が無ければ生活保護という便利な制度がある。フィリピンでは年金制度はあってもささやかで、それにあやかれる人も少数だ。まして生活保護などありえず、人々に国家に頼るという発想はない。

フィリピンでは老後の保険に子どもを作るという考えがある。だから、子どもがいない夫婦は子どもをもらって育てる。そうやって家族を維持して、老後の備えをする。

彼らにとっては、家族を作る過程こそが人生で、喜びなのだ。そして、老後はその果実をエンジョイする。これは人類が数百万年続けてきた仕組で、ほんの数十年前に作られた年金制度で代用できるわけがない。年金や生活保護など社会福祉と呼ばれる先進国の誇りである福祉制度が、家族を崩壊させる原動力となったのではないか。飽食によるメタボが肉体を蝕むことに通じるところがある。

老人が死なない日本

家族が見守るなか、すみやかに旅立つフィリピン

最近、こんなことをビザ申請に訪比された退職者と話をしていたら、その方は「さらに老人が死なないんだよね」といった。寿命を全うすべき老人が、医療の力で生き永らえ、膨大な医療費を浪費している。回復の可能性がなくても、医療関係者はあらゆる手を尽くして死なせない。医療機関は健康保険のおかげで取りばぐれがないから、高額な延命治療を施す。これが多大な財政負担を国家に強いる。

一方、フィリピンでは、健保の制度はあってもその恩恵は少額で、限られた人々のものだ。だから老人が大病を患うと、家族が賄える範囲の治療しか施さない。病院も、支払いの保証がない限り治療を行なわない。行き過ぎた延命治療はありえないし、あっても一部の金持ちのセンチメンタルでしかない。老人は不治の病を患うと、家族が見守る中、すみやかに神の元に旅立つ。

健康保険制度が医療制度を捻じ曲げ、意味なき高齢化社会を作り出す一因になっている。

年金も健保も不十分なフィリピンは、家族という強力な社会制度を維持し、何であろうと生き抜く活力に満ちている。一方、日本は社会福祉のおかげで、家族制度が崩壊しつつあり、まさにメタボで瀕死の状況だ。このまま家族という仕組みを取り戻せなければ、フィリピンにとって代わられるかもしれない。

マニラではコンドミニアム・プロジェクトが目白押し(2014-2-12)

2011 年、すでにマニラに建設ラッシュが始まっていた

マニラでコンドミニアムの建設ラッシュが起きている記事を 2011 年 1 月に書いた。マニラ中心部マカティだけで 20 件、計画中のものを入れると 30 件、マニラ全体で 100 件を下らない。これは異常な状況だった。売れる見込みがあるから作る訳で、この需要は一体どこから来るのか？

「2009 年 9 月マニラの北マリキナが大規模な洪水に襲われ、それに懲りて冠水の心配のない高層コンドミニアムに需要が集中している」と解説されたが、それだけではこの状況の説明はつかない。海外出稼ぎフィリピーノ (OFW) が買っているというが、それにも限度があるだろう。

猫も杓子もコンドミニアム開発を手掛けるようになった

アヤラ、フィル・インベスト、メガ・ワールド、シティ・ランド、フェデラル・ランドなど老舗のデベロッパー以外に、デパートチェーンの SM やロビンソン、建設会社最大手の DMCI、更に食品業界巨人サンミゲルなども開発に乗り出した。つくれば売れる、売れるからつくるの様相を呈し、儲かりそうだと猫も杓子もコンドミニアム開発を手掛けるようになった。

一説には、中国の不動産投資が一段落し、当面大幅な上昇は望めなくなり、「次は東南アジアだ」という投資マネーを呼び込んでいるのだという。プレセール（計画中の物件販売）の物件を購入し、完成したら転売、投資利益を得る投資家が多いようだ。

しかし実需は伴っているだろうか。毎年何割も値上がりし、高値の物件を購入し、実際に住む人がいるのか。日本でも 1990 年代の初めバブルがはじけ、長い間不動産市

場が低迷した。リーマンショック後はドバイで同じことが起きた。アメリカの景気低迷もしかりだ。マニラは大丈夫なのだろうか。

2008 年からわずか 3 年で、コンドミニアムは 3 ～ 4 倍に値上がりした

2008 年出版の拙著『金なし、コネなし、フィリピン暮らし』（イカロス出版・2012 年 1 月改訂版発売）を読み返すと、コンドミニアムの価格は 1 平米あたり 3 万～6 万ペソ（約 6 万～12 万円）。その後、5 万～10 万ペソ（約 10 万～20 万円）となり、11 年には 10 万～20 万ペソ（約 20 万～40 万円）まで上がった。わずか 3 年間で 3 ～ 4 倍に値上がりした。

私の推測では、「海外の投資家を呼び込む業界の歌い文句」だった。業者が海外の投資家に高値で売りつけ、建設中にすでに値上がりしていると、さらに高値で転売させる。上がるから買い、買うから上がる構図が続くうちは問題ないが、これは投資家間で取引されているだけで、自分が住むために買う人は少数ではないのか？

実需が伴わぬ価格の高騰はバブルで、いつかははじけ、投資家は一斉に資金を引き上げる。最後の購入者がババをつかみ、建設途中で頓挫したビルや住む人のない高級コンドミニアムがマニラ中に溢れ出す。

日本で買うと 5000 万～1 億円の物件を誰が買う？

こんな高い物件はフィリピン庶民には手が出ない。外国人投資家は割安感から買っているかもしれないが、所詮フィリピンの物価、生活水準を知らぬ外国人のやることだ。フィリピン人が 50 平米ほどの小さな住まいに 500 ～ 1000 万ペソ（約 1000 ～ 2000 万円）を払うのは常軌を逸している。私の「日比物価 10 倍比較論」では日本なら 5000 万～1 億円相当。都心の一等地でも 50 平米のマンションに 1 億円も払うだろうか？

実際、一般庶民のマイホーム購入予算は 100 ～ 200 万ペソ（約 200 ～ 400 万円）がせいぜいで、この金額でもカビテやラグナなどマニラ郊外で 50 ～ 100 平米の土地付き低所得層用住宅が手に入る（最近はやっと値上がりしているが）。

私の家（コンドミニアムとして登録されたタウンハウス）はマカティの外れにあるが、築 15 年、200 平米で 400 万ペソ（約 800 万円）だった。平米単価は 2 万ペソ（約 4 万円）にすぎない。

現状の相場では 600 万～700 万ペソ（約 1200 万～1400 万円）で、かなりお買い得だったらしい。最近のコンドミニアムは建設コストや相場の上昇でユニットはより小さくなり、大型のコンドミニアムは少なくなっている。50 平米くらいの物件で 300 万ペソ（約 600 万円）前後というから、マカティ中心街の物件の半額から 3 分の 1 程度だ。

こんなバブルの様相を呈しているとき、プレセールの物件を買うのはリスクが高い。一方、完成したものは高値だ。だから、自分で住むのであれば、多少古くてマカティ中心街から外れていても、投機の金が回ってこず、異常な値上がりの嵐に巻き込まれない中古物件や郊外の物件を買うほうが賢いというのが私の提案だった。ちょっとした古さと不便さを我慢すれば、まだ安全・確実・格安な物件を見つけることができる。

500 万～ 1000 万ペソ（約 1000 万～ 2000 万円）も出すのなら、大型のタウンハウスを買うのがよい。4LDK でトイレが 4 つある旧式の住居だがとても住みやすい。最近の標準的ユニットの 50 平米と、200 平米のタウンハウスが同じ価格なら、どちらが得かは考えるまでもない。ただ中古で広いだけに、改装や家具に 50 万ペソ（約 100 万円）程度費やしてしまったが。

さらに 3 年経った今、その後の不動産事情は？

さてあれから 3 年、マニラの不動産事情はどうなっているだろうか。

当時、建設中や計画中だったプロジェクトもほぼ完成し、入居開始となっているが、賃貸用のまま空室の物件が大半を占めている。コンドミニウムの建設ラッシュは相変わらず衰えないが、空き地のまま着工見合わせのプロジェクトも目立ってきた。かつて隆盛をほこった販売エージェントも、売れ行きが鈍化し苦戦している。

2014 年 1 月 11 日のマニラ新聞一面では、「不動産投資評価で躍進」と題し、アジア太平洋域内 23 都市の不動産投資・開発見通しに関する報告で、マニラ首都圏は東京、上海、ジャカルタに続く 4 位となり、前年の 12 位から大きく順位を上げたと報じていた。さらにコンドミニウムや商業用施設では域内 1 位、オフィス物件では 2 位にランクされた。一方では小見出しで、「バブル予兆裏付け」とも書かれている。

今ははやし立てられているが、皆が皆「儲かる」といい始めればもはやピークで、後は下るしかないのがバブルだ。販売エージェントは相変わらずおいしい話だけを並べ立てているが、尻に火がつき始めているのは百も承知だろう。フィリピンあるいはマニラに暮らしている者にとっては、現在のコンドミニウム相場がいかに非現実的なものか、火を見るよりも明らかなのだから。

フィリピンの庶民派ショッピングセンターで見つけた 10 万円の高級レプリカ腕時計（2014-2-4）

子どもの教育のため母子でマニラ暮らしの両親が、孫の顔を見にやってきた。観光には興味がなく、ボニファシオ・グローバル・シティとアメリカン・セメタリーで近代フィリピンの勃興を視察後、ショッピングをエンジョイしてもらおうと掘出し物のメッカ、グリーンヒルを案内した。

マニラ郊外のグリーンヒルは庶民のショッピングセンターで、真珠などの宝石店のほか、レプリカの店も多い。店先にはプラダやコーチのバッグがずらりと並んでいる。値段交渉の仕方を聞かれたので、「言い値の半分で交渉すればよい」と答えたが、相手も限界に近づくと梃子でも値段を下げなくなるのでその辺が折り合いとなる。

ふと見ると、先日私が衝動的に買ったブランド時計がテーブル上に置かれていた。1200 ペソ（約 2700 円）で買ったが、値段はなんと 4500 ペソ（約 1 万円）だという。とんでもないと拒否すると瞬く間に値が下がり 2 個で 2200 ペソ（約 5000 円）になった。同じ店に何度も通うと、だんだん仕入れ原価が見えてくる。

フロアの奥の突き当りを右に折れ、真珠の装飾品店を通り過ぎると、再びバッグやカバンの店が現われる。そこにはかなりの数の時計屋があり、ショーケースには高そう

な時計が収まっている。

オーディマ・ピゲ AUDEMARS PIGUET とパティック・フィリップ PATEK PHILIPPE はスイスの最高級腕時計のブランドだが、ロレックスやカルティエは一山いくらの扱いで、ショーケースに束で並べられている。ここの陳列品は従来のクラシックなものではなく、いかにも現代的で重厚なデザインだ。

まず、右側のショーケースの HUBLOT という余り馴染みのないブランド時計の価格を聞いてみた。なんと「2 万ペソ」という答え。日本円に換算して 4 万 5000 円だから、正規品でも十分に高級腕時計だ。本物かと聞いたら、「レプリカ（復刻版）」だという。

ショーケースに並んでいるのが「A クラス」と呼ばれ、500 ～ 1000 ペソ（1000 ～ 2000 円）程度だ。最近ではロレックスやカルティエなどのブランドものより、流行の大型時計のほうが値段が高い。

こちらが本気と見て取ると、店主は店の中からケースを持ち出してくる。これが「AAA（トリプル A）」と呼ばれるパチもの的高级品で、2000 ～ 3000 ペソ（4000 ～ 6000 円）くらいで本物と見分けがつかない。だから「レプリカ」と呼ばれる 2 万ペソの時計がいかに破格かわかる。

納得？ 10 万円のレプリカは、本物なら 700 万円の超高級腕時計

そして、左のショーケースのオーディマ・ピゲやパティック・フィリップの値段を聞き、開いた口が塞がらなかった。なんと 4 万 5000 ペソ。日本円で約 10 万円。私が生涯購入したことのない値段の腕時計。これこそ本物かと聞いたら、当然のことながら「レプリカ」という答え。

本物なら 300 万ペソ（約 700 万円）だそうだ。700 万円といえば高級車一台分だから、レプリカが 10 万円でも不思議はない。しかし、そんなものを作る人がいるというのが不思議でならない。中の器械まで本物と寸分違わないのだとしたら、その技術を活かす道は他にもありそうなもののに。

ところで最近、私が成田空港のガチャガチャ（100 円入れてレバーを引くとカプセル入りのおもちゃが出てくる機械で、数十年前、私の子どもたちが夢中になっていた）で買ったおもちゃの時計を、KIAN が嬉しがっている。そこでショーケースの外に並んでいた安物の時計に目をつけた。値段は最低 100 ペソ（約 220 円）から。

KIAN にブランドの時計は似合わないから、G ショックを 450 ペソ（約 1000 円）にままけてもらって買った。家に帰りよく見たら、本物と見分けがつかぬ精巧な出来栄えだ。アナログとデジタルの両方がちゃんと機能して、ストップウォッチも使える。まさか本物の横流しではないだろう。

不動産購入トラブルを未然に防ぐ

フィリピン・コンドミニアムに所有期限がある？ (2014-1-28)

「友人に＜コンドミニアムの所有権が 50 年の所があるから気をつけろ＞とアドバイスされた。本当ですか？」

ある退職者からこんな問い合わせを受けた。「ディベロッパーが自社所有地に建設

したなら問題ないが、そうでない場合はコンドミニアムの所有権の期限は 50 年」というのだ。

フィリピンでは外国人の土地の所有は憲法で禁止されており、土地付一戸建住宅を外国人は保有できない。しかしコンドミニアムはそれぞれのユニットが個別に登記されており（CCT = Condominium Certificate of Title、あるいは単にタイトル）、外国人でも総ユニット数の 40 %まで保有できる（コンドミニアム法）。その場合、各々のユニットは土地を区分保有していることになり、CCT が発行されている限り 50 年という保有期限はない。

一方、バギオのキャンプジョンヘイやスービックなどの「経済特別区」で販売されているコンドミニアムは、開発から 50 年の期限付き所有権（Lease Hold Right）となる。経済特区では土地はすべて政府からの借地となっているため、コンドミニアムといえども永久に保有できるわけではなく、期限がきたら国に返還しなければならない。

同様に、もしディベロッパーが 50 年の借地契約でコンドミニアムを開発・販売したのなら、その所有権は借地契約の終了とともに土地のオーナーに帰属することになる。その場合は住宅をコンドミニアムとして登記することはできず、個別のユニットのタイトル、すなわち CCT は発行されない。

コンドミニアムを購入する場合、ユニットごとのタイトル（CCT）があるかどうか重要だ。コンドミニアム全体のタイトル（マザータイトル）では意味がないので要注意だ。ちなみに土地のリース契約（借地権）は法的に 50 年が限度で、通常 25 年契約で 25 年の延長を可とする。

フィリピンでは建物は土地に帰属する

フィリピンでは建物のタイトルはなく、建物は土地に帰属すると解釈される。従って、できあがった住宅のタイトルといっても、それは建物が建っている土地のタイトルで、土地の売買に伴い建物も同時に売買されてしまう。

住宅を建設する場合、その土地を購入するか、長期リース（借地権の設定）していないかぎり、住宅の所有権を主張できない。この土地のタイトルのことを TCT (Transfer Certificate of Title) といい、コンドミニアムのタイトル CCT とはその概念に大きな相違がある。

注意すべきことは、建物の形状からコンドミニアムと呼ばれる場合と、登記上のコンドミニアムが異なることだ。

建物の形状で分類すると、一戸建、タウンハウス、アパート、コンドミニアムとなるが、登記上は宅地とコンドミニアムしかない。たとえ建物の形状がどうであれ、コンドミニアムとして登記されれば、その 40 %のユニットまで外国人が保有できる。

私の住んでいるタウンハウスはコンドミニアムとして登記されているので、外国人でも購入できる。マニラ郊外のパラニャケに日本人不動産業者が開発した高級住宅地イリジウムもしかり。たとえ一戸建であっても、法律上はコンドミニアムとして登録することが可能なのだ。

一方、建物がコンドミニアムの形状をしていても、コンドミニアムとして登記されていない場合は、ユニットごとの売買はできず、ユニットを短期あるいは長期リースすることになる。こうした物件を売買するとなると、建物全体と土地を一括して取引しなければならない。しかしこの場合は土地付なので、外国人は購入できない。

フィリピンでは退職者ビザの取得に預託金が必要だが、このような事情から退職庁（PRA）は、預託金を使ってコンドミニアムの購入、あるいは住宅の長期リース（25年以上）をする場合、タイトルの存在を厳格に管理している。その条件の主たるものは以下のとおり。

- ①貸し手ないし売り手名義でその土地（TCT）ないしコンドミニウム（CCT）のタイトルが存在すること
- ②長期リースについては PRA の定める借り手の保護に関する文言をあらかじめタイトルに裏書すること
- ③コンドミニアムの購入については 180 日以内にタイトルを買い手名義に変更するとともに、PRA の許可なしに勝手に売買できないという趣旨の裏書すること

この条件が退職者の権利を守るためのものであることは理解できるが、実際問題、これらをクリアするのは容易でない。物件を選んだらまず PRA に相談し、指示に従って販売者に必要書類を要求し、PRA の事前審査を受けるべきだ。そうでないと土壇場で預託金が使えなくなり、途方にくれてしまう恐れがある。

フィリピンを愛しているからこそ、悪いところを探してみた！（2014-1-21）

私は従来からフィリピンの負のイメージ、偏ったイメージ（危険、汚い、金欠の 3 K）を払拭し、フィリピンの良い所を見直してもらうよう努めてきた。近い、安い、優しいの 3 つの「い」、「3 I（3 つの愛）」であり、英語圏、退職ビザという優れた永住ビザの存在だ。

いつもフィリピンの良い所を見つけようと心を砕き、フィリピンを褒めることばかり考えていた。先般、ロングステイフェアで、フィリピンのロングステイに興味を抱く人から、「では、フィリピンの悪い所は何ですか？」と聞かれ返答に窮した。そんなことを真面目に考えたことがなかった。

フィリピンの紹介では、良いことばかりを並び立てても駄目で、良い所と悪い所を公平に紹介するべきだと悟った。

そこで初めて、フィリピンの悪い所を整理してみた。

交通渋滞、停電……インフラはまだ未整備

いずれの発展途上国でも同じだが、フィリピンの交通事情は頂けない。電車は数本しかなく、主要道路は万年交通渋滞だ。ちょっと大雨が降るとマニラ中の道路が冠水し交通網が麻痺してしまう。

更に大きな台風が来ると、途端に停電する。数日の停電は普通で、大きな台風では数週間、今回のレイテ地方を襲った台風 30 号（ヨランダ）のような超弩級の台風の場合、被災地の停電は半年続く。にもかかわらず電気料金は日本以上に高い。

それにタクシーが悪い。日本人訪問者の多くが空港でタクシー使用を嫌う。危険というより、運転手との値段交渉がいやなのだ。彼らは巧に料金を割り増しする。

更に空港職員までもがタクシー、タクシーと呼びかけレンタカーに案内し、マカティまで正規タクシー（クーポンタクシー又はイエロータクシー）の倍以上の 1000 ペソ（約 2200 円）程度の料金を要求する。

しかも全日空を除くすべての外国航空便が到着する第 1 ターミナルは、渋滞のため自家用車で迎えに行くのも容易でない。空港からの足はタクシーに限られ、訪問者に

としては死活問題だ。

分厚い貧困層、首都圏マニラにもスラムが点在

フィリピンの半数以上の国民が、1 家族毎月 1 万ペソ（2 万 2000 円）以下で暮らす貧困層だ。だから国中「スコーター」と呼ばれるスラムが点在する。首都圏マニラにもそこかしこにあるので、外国人にとってイメージダウンも甚だしい。

この地域には犯罪者も多数住んでいる。見知らぬ人が立ち入るのは極めて危険で、治安の悪さを印象づける。日本ではこうしたスラムに迷い込んだ日本人をテレビのドキュメンタリーや映画・小説などで紹介するので、まるでフィリピン中がスコーターのような印象を与えている。

しかし貧困層だからといって、誰もが悪人というわけではない。殆どが良い人で、フィリピン人のアイデンティティであるホスピタリティに溢れている。また貧困層があつてこそ、メイドやドライバーなど仕事や家庭を支える労働力を安価に雇用することができる。これはフィリピンのメリット（安い）の裏返しでもある。

議員・役人の汚職体質、金のトラブルは民間レベルまで

今、新聞やテレビを賑わしているのが議員の汚職だ。アロヨ政権の 9 年間に、不正に流用されたポークバレル（国会議員向け優先開発補助金）は 1 兆ペソ（約 2 兆 2000 億円）に達するという。

上がこうだから、末端の役人汚職あるいは賄賂体質は押して知るべしで、役所は袖の下なしではてこでも動かない。ちゃんと働いて手にする代償以外の濡れ手に粟の利益を模索する体質が染み込んでいる。

お金に関する感覚は民間レベルでも同じで、愛の代償に家を持っていかれたとか、貸した金が戻らないとか、頼りにすべき古参の日本人が新参の日本人を騙すとかいった話は枚挙に暇がない。

フィリピンで日本と同じ感覚で金を出すと、しっぺ返しを被ることになる。フィリピンに限らないことだが、日本人は他人を信用し安易に大金をはたと評判で、よほど気をつかいて財布の紐を締めておかないと、早晚虎の子の退職金を失ってしまいかねない。

100 万円あれば、フィリピンでは一家族が 5 年間暮らしていける。フィリピン人にとっては命を張ることさえ厭わない大金なのだ。

最近、フィリピンは「世界」の名を冠するニュースで持ちきりだ。2013 年の「ミス・インターナショナル」と「ミス・ワールド」はフィリピン代表がともにグランプリ、「ミス・ユニバース」でもフィリピン女性が 3 位に入賞した。アメリカの旅行雑誌「travel+leisure（トラベル+レジャー）」のベストアイランドで、パラワン島は世界一、ボラカイ島が世界 2 位になり、パラワンの海中洞窟は「新・世界七不思議 自然版」（新世界七不思議財団・主宰）に選ばれた。女性の地位の高さも世界 5 位で、日本の 105 位をはるかに凌駕する。

その一方、前述のマニラ空港第 1 ターミナルは今年も世界ワースト・ワンに選ばれた。さらに最近、史上最大のモンスター台風に襲われ世界中の話題になっている。

良きにつけ悪きにつけ、フィリピンも世界の注目を浴びてきたということだろう。

「男女格差報告 2013 年版」(2014-1-10) 男女平等、フィリピンが世界第 5 位に躍進

このランキングは、男性に比べ女性が差別され、その格差が小さい国の順位ということのようだ。しかし世の中、常に男性が上位とは限らない。フィリピンではどう見ても女性上位、女性が世の中や家庭を引っ張っていると感じる。

女性が世の中や家庭を引っ張るフィリピン

フィリピンでは、「女だてらに」とか「女のくせに」などという言葉は死語だ。上司が女性であることに男性は何の違和感も示さない。

マルコス以降、大統領は女性が 2.5 人、男性が 2.5 人で拮抗している（エストラダは任期途中でアロヨに変わったので 0.5 人、アロヨ は 1.5 人と数えた）。更に司法長官、最高裁長官など国の要職の多くも女性が占める。むしろ「女だからこそ」という言葉が当てはまりそうだ。

銀行の支店長などは殆どが女性で、PRA（フィリピン退職者庁）などの役所でも、マネージャーなど半数が女性だ。職場では男女の区別はまったくない。唯一違いがあるとすれば、女性は 60 日間のマタニティーリーブ（有給出産休暇）が保障されていることだ。当然、妊娠のための退職という現象は起こらない。

子育てはどうなるかということ、フィリピンではママの親、兄弟姉妹、あるいはメイドやヤヤ（子守）が皆で子育てする。母親が仕事をあきらめる必要はない。もちろん介護辞職もない。女性は職場で自由に能力を発揮できる。

家庭内ではどうだろうか。ここはまぎれもないカカア天下で、例外なく妻が家庭を仕切る。家庭内では料理は夫、洗濯は妻などと役割分担され、決定権は常に妻にある。

そうすると社会では 50 : 50、家庭内では 100 : 0 で女性が有利になる。どちらが上位か、自ずと答えは明らかだ。

1990 年代、私はフィリピンでエンジニアリング子会社の運営を任され、多くの学生を面接・採用した。日本では男の仕事の土木工学（Civil Engineering）でも、フィリピンでは学生の半数以上が女性だった。

機械、電気、建築なども少なからぬ女性がおり、化学工学では大多数が女性だった。工学系でさえこうだから、文系では女性が圧倒していることは容易に想像される。フィリピンの大学進学率は日本と同じく 30 %を超えるが、女性のほうが若干高い。

大志をいなく日本女性は、閉塞感のある日本を抜け出し、フィリピンに渡って思う存分能力を発揮してほしい。

フィリピンの交通の主役、パジャックとトライシクル(2013-12-20) ドライバーたちの懐事情

私の農場があるビコール地方のタバコ市では、トライシクル tricycle（サイドカー付きモーターバイク）とパジャック pajak（サイドカー付き自転車）が交通の主役だ。

フィリピンの都市では、近接への交通手段として、車を持たない庶民は jeepney ジープニーかトライシクルあるいはパジャックに頼るしかない。タバコ市ではジープニーは比較的長距離を走り、市内の交通は専らトライシクルとパジャックによるが、パジャックはやたらと多い。

近くなら「パジャック」、距離があれば「トライシクル」

フィリピン人、とくにフィリピン女性は歩くのが嫌いだ。だから数百メートルの距離でもパジャックを使う。

距離により料金は違うが、1人頭5ペソ、10ペソ、15ペソ（約12～37円）程度でタバコ市街地なら大抵の所へ行ける。数年前は数ペソ程度だったが随分値上がりした。タバコ市はマヨン火山の裾野にあるため、海から陸にむかって緩い勾配がある。上りが10ペソ（約25円）なら、下りは半額の5ペソ（約12円）だ。

一方トライシクルはタバコ市郊外のちょっと離れた所に行くのに使う。やはり距離によって料金が異なり、数キロの距離で、1人頭8ペソ、10ペソ、13ペソ（約20～32円）となる。

距離だけ比較すればトライシクルのほうがずっと安い。ジープニーあるいはGTX（乗り合いワンボックスカーの14人乗り）にも同じことが言える。長距離（例えば30キロ離れたレガスピ市まで）で35ペソ（約87円）と、もっと割安だ。人力を使うのだからパジャックが高いのはやむをえない。

もっとも過酷な仕事のひとつ「パジャック・ドライバー」

パジャック・ドライバーは世の中でもっとも過酷な仕事のひとつだ。自転車に2人も3人も乗せて走るのだからどんなに大変かわかる。それを5ペソ（約12円）、10ペソ（約25円）のため、一日中炎天下、あるいは雨に打たれやり続けなければならない。

彼らはトライシクル・ドライバーになるのが夢だが、エンジン付きなら自分の心臓を使ってペダルをこぐことから開放される。

タバコ市には3000台のパジャックと1500台のトライシクルが営業している。タバコ市の人口が10万人で、そのうち大人が半分の5万人、男がそのまた半分の2万5000人とする、成年男子人口の20%弱がこの仕事についていることになる。

彼らはどれだけ稼いでいるのだろうか。トライシクル1台は約10万ペソ（約25万円）で、それを1日100ペソ（約250円）の賃借料（バウンダリー）で借りる。

一方、パジャックは自転車なのに1台1万7000ペソ（約4万2000円）もするが、新車で1日50ペソ（約125円）のバウンダリーだ。価格が6分の1でバウンダリーは半分というのは計算が合わないが、パジャックの償却はせいぜい3～5年、それに比べてトライシクルは15～20年程度もつからだそう。

収入は少ないが、子どもに囲まれて幸せ

トライシクルの売り上げは1日300ペソ（約750円）程度、ガソリンが80ペソ（約200円）、バウンダリーが100ペソ（約250円）で、1日の収入は120ペソ（約300円）程度。

一方、パジャックの売り上げは150ペソ（約370円）程度、バウンダリー50ペソ（約125円）を引いて100ペソ（約250円）程度の収入となる。どちらも100ペソ（約250円）程度で大差のない収入だが、肉体の疲労度では雲泥の差がある。

1日100ペソ（約250円）の収入では1カ月休みなく働いても3000ペソ（約7500円）にしかならない。フィリピンで一般層と貧困層との境界は1カ月5000ペソ（約1万2500円）といわれているから、彼らは間違いなく貧困層だ。

パジャック・ドライバーの殆どはスコーター（スラム）に住む。それでも一家に2

人の働き手がいれば、なんとか家族を養っていける。日本ならこんなにしてまで何故生きるのか疑問がわくような仕事だが、子どもたちに囲まれて案外幸せなのだ。

困窮日本人はフィリピンの人たちに「迷惑」をかけているのか(2013-12-13)

退職ビザ申請者の半数は 50 歳未満

すこし前だが、マニラ新聞記者の水谷竹秀さんから取材を受けたことがある。私がお世話した退職者でユニークな方がいたら紹介してほしいというのだ。

私の回りには『日本を捨てた男たち』（集英社文庫）の著書に出てくるような困窮日本人はいないが、退職ビザを申請する方々の最近の特徴を話した。

- ① 申請者の半数近くは 50 歳未満と比較的若く、もちろん現役組だ。
- ② ビザの取得に主体的に動いているのは奥さん(夫婦で申請の場合)、あるいは独身ないし単身の女性だ。女性が半数近くで、子育て真最中の方も多い。
- ③ 申請者の半数近くは、大学教授、医者、教員、大手上場会社勤務など社会的ステータスのある人である。
- ④ 申請者の半数近くは退職ビザ取得のため、初めてフィリピンを訪れた人たちである。ビザの取得手続きで初めてフィリピンを訪問する方も多い。

フィリピンで永住ビザを取る人は、『日本を捨てた男たち』に登場するような「じゃぱゆきさんの尻を追いかけてやってきた中年ないし熟年男性」か、「老後を物価の安いフィリピンでゆったりと過ごしたいご夫婦」と大方の人は思っている。だが最低 2 万ドル（約 200 万円）の預託金を積んで退職ビザを取得する人々の中で、これら中年・熟年男性あるいは夫婦は少数派になっている。

支援されることは、「迷惑をかける」ことか!?

水谷さんによると、日本大使館は、生活に行き詰った日本人に対して、困窮に陥ったのは自己責任だとして必要以上の手を差し伸べず、せいぜい日本にいる家族にコンタクトを取って帰国費用の支援を求めるだけだという。

しかし、「あんな息子（親、あるいは兄弟）には愛想をつかしているから勝手にしてほしい」というのがほとんどの家族の回答だそう。彼らは、日本に帰ったとしても生活の目処は立たず、このままフィリピン人の世話になるしか生きる術がない。

大使館の邦人保護の担当官は、女の尻を追いかけてフィリピンにやってきて持ち金を使い果たし困窮に陥るのは自己責任で、何のゆかりもないフィリピンの人々に迷惑をかけて申し訳ないと言う。

この「迷惑をかける」という言葉に、私は「かちん」ときた。困り果てている人に対して支援する人々に、「迷惑をかけている」という感覚に。

一方、日本の家族は大使館の依頼を拒否し、自分の家族が縁もゆかりもない人たちに迷惑をかけていることを意に介しない。

家族が多いから、貧困にあえぎながらも生き抜いていける

我々日本人は子どものころから「人に迷惑をかけてはいけない」「他人様、世間様

に迷惑をかけないで生きていくことが美德なのだ」と教えられてきた。

自殺するときは、遺書に「迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」と綴るのが定石だ。世間や家族への恨みつらみよりも、世間にかかる迷惑を詫びるのが先決なのだ。E-メールでも、英語の「JUNK MAIL（ごみメール）」が日本語では「迷惑メール」になってしまう。

しかしフィリピン人は、困った人を助けるのを決して迷惑とは思っていない。それは人間としての義務であり喜びなのだ。

家族が困っていれば、自分の三度の食事を削ってでも喜んで支援する。家族の範囲は親や子どもはもちろん、兄弟姉妹、兄弟姉妹の配偶者、配偶者の兄弟姉妹にまで及び、その数は数十人に達することもある。

日本ではせいぜい、配偶者と親と子どもくらいまでが家族と認識される（要は戸籍に登録されている範囲）が、フィリピンでは家族は兄弟姉妹の配偶者、そして配偶者の兄弟姉妹にまで及ぶ。これは逆に、自分が困難な境遇に陥れば、親・兄弟姉妹ばかりか配偶者の兄弟姉妹までが支援してくれるということだ。

フィリピン人と結婚すれば配偶者の兄弟姉妹にまで頼りにされる。これはとても理解できないという人が多いが、家族というものの概念が違う。

家族は多ければ多いほど支援が大変だが、逆に頼りにもなる。だからフィリピン人の多くは、貧困に喘ぎながらも生き抜いていくことができる。

人の世話をするのが「生きている証」

日本のように核家族化が進むと、面倒をみる範囲は少なくて済むが、自分が困難な状況に陥った時、年老いた親と幼い子どもだけでは頼りにならない。自分しか頼れず、何かあったら自殺するほかなくなってしまう。

しかも、自分の子どもに対しても「老いたら子どもの世話になりたくない」「迷惑をかけたくない」と自慢げに言うのが昨今の熟年夫婦の一般的風潮だ。

その息子は、「嫁の手前、親の面倒は見られない」と臆面もなく語る。このように親子が断絶したおかげで嫁・姑の確執はなくなるだろうが、姑がいない分、子育てに苦勞する女性、あるいは子育て放棄の女性も多いはずだ。

親子で面倒を見ることが迷惑と認識されたら、一体どうになってしまうのだろうか。赤ちゃんは面倒＝迷惑の塊で、何から何まで世話しないと生きていけない。最近は親の育児放棄が社会問題となっている一方、親の面倒見を放棄して施設に預けるのが常態化している。こんなことで日本人は世代を超えて生き永らえていくことができるのだろうか。

65 歳以上の高齢者がすでに 25 %になり、近い将来 30 %、そして 40 %に達する日本では、自分は自分で面倒見るようにと定年が 65 歳まで延長された。元気な高齢者が働くのは大いに結構だが、これが逆に若い人の就業機会を狭めている。高齢者は若者の職場を奪うのではなく、高齢者なりの役割あるいは働き場所があるのではないか。

縄文時代の平均寿命は 10 代で、江戸時代でも 30 代だ。戦後、平均寿命は 50 代から 80 代に延びた。そうすると人間は本能的に子どもをつくらない、あるいはつくれなくなってしまう。

一方、フィリピンでは巷に子どもが溢れている。住宅街あるいはスコーター（スラム）に足を踏み入れると、どこも子どもだらけだ。子どもこそが人類の原動力のはずだから、子どものいない、あるいは子どもを育てることのできぬ社会＝日本はいずれ滅びゆく運命にあるのだろう。

話を元に戻そう。人は子ども時代、親の面倒だけに頼って生きてきた。そして老人になれば子どもに面倒をかけて生涯を終える。これが人生の輪廻というものだ。

病気やけがで早くして人の世話になったとしても同じことで、世話するのが人間としての義務であり生きている証なのだ。だからフィリピンにおいては、人の迷惑を受け入れて面倒をみることは「美德」なのだ。

フィリピン産トイレットペーパーは水に溶けない(2013-12-4)

フィリピン人はトイレで紙を使わないし、便器にも座らないが、どうしているのか？フィリピンのトイレは柄杓と水桶付き。ウォシュレット先進国だった！

しばらく前、日本からマニラを訪問した人がトイレで大量のトイレットペーパーを使い、ホテルのトイレ、事務所のトイレと片っ端から詰まらせた。使用した後のトイレは紙が一杯で、後始末に往生した。

なぜ簡単にトイレが詰まるのか不思議だったが、その謎が解けた。フィリピンのトイレットペーパーは水に溶けない。

実際に試してみたが、水を含み柔らかくなるものの決して溶けない。だから多めに使うと便器の穴をふさいでしまい、にっちもさっちもいなくなる。そのためクラークの日本人向け宿泊施設では、トイレットペーパーをすべて日本から運搬している。

フィリピンはウォシュレット先進国？

トイレに紙はなくても、タボ（柄杓）と水入りバケツが置いてある。さらに最近では、ホースの先に小さいシャワー付きのものが便器の脇に設置されている。フィリピンでは用を足した後、水で後処理をする。その後、トイレットペーパーかタオルで濡れた尻を拭くか乾燥させる。

使用済みのトイレットペーパーは汚くないから、便器の中ではなくゴミ箱に捨てる。実際、ロール状トイレット・ペーパーはティッシュと呼んで、鼻をかんだり手を拭いたりするのに使用し、トイレで使うことは少ない。だから水に溶ける必要がない（すぐ水に溶けるようでは使い物にならない。日本で販売される箱入りのティッシュが水に溶けないのと同じ理屈）。

ちなみにこのフィリピン式ティッシュは 4 個で 46.75 ペソ（約 90 円）。こんな高いもので汚れた尻を拭くのは罰当たりかもしれない。

用を足した後、水で洗うことに慣れると、紙だけで尻の始末は不可能だ。きれいにしようと徹底的にこすれば痔になる。ウォシュレットを使い慣れたら、それなしでは用が足せなくなるのと同じだ。この点、フィリピンはウォシュレット先進国と言っていいかもしれない。

清潔好きのフィリピン人は便器に座らない！

最近でこそ、ウイルコンなどの住宅器材販売店でも TOTO ウォシュレットが置いてあるが、やたらに高い。常夏の国ではヒーターはいらないし、単純なもので充分なはずだ。だから最近ではトイレ用ホースシャワーがどの家庭にも付くようになった。タボにバケツではちょっとみっともない。しかしタボに慣れると、それはそれでなかなか具合が良い。

フィリピン人はたいへん清潔好きだから、公共のトイレで便座に座ることは決して

しない。男性の小用なら問題ないが、女性の場合は浮き腰で用を足す。その後は水で洗う。大となると、便器の縁に乗っかり用を足す。だから便座は邪魔ですべて取り外してある。便座が汚いからそうするのではなく、便座を使用しないから汚いままにしてある。

それにつけてもフィリピンの公衆便所は頂けない。小用はなんとか我慢できても大はとても無理。せいぜい使えるのは五つ星ホテルのトイレくらいだろう。だから私は、出先で催すとホテルのトイレに行く。

超大型台風 30 号がフィリピンを直撃！【その 3】(2013-11-28)

台風 30 号（国際名：ハイラン、現地名：ヨランダ）がフィリピン中部、ビサヤ地方（サマル、レイテ、セブ、パナイなど）を直撃し、11 月 26 日で 18 日目を迎えた。当地の日本語新聞、マニラ新聞は、今日も一面全部を割き台風の記事を書いている。

24 日午前 6 時現在、国家災害対策本部発表によると、死者 5235 人、行方不明 1613 人（合計 6848 人）、全半壊家屋数は 114 万棟で、73 万 8000 世帯の 345 万 5000 人が避難生活を続け、被災者数は 216 万世帯 1001 万人、人口の 1 割を超えフィリピン史上最悪の災害となった。

海外からの支援金をどう分配するかが復興の鍵

台風の記事が新聞に出始めたのは 11 月 7 日で、「猛烈な台風」とは言われていたものの、ここまでの被害になるとは誰も予測できなかった。台風が上陸した翌日（11 月 9 日）の発表が死者 3 人、その翌日が 138 人、それが 229 人、1774 人、2344 人、3631 人、3976 人、4011 人、5209 人、そして現在の 5235 人と驚くべき勢いで増えていった。これは通信網が破壊されて、現地の状況が把握できなかったためだ。

大統領府によると、外国政府や国際機関による援助表明額は 24 日までに、国家予算の 3 割に匹敵する 149 億 8500 万ドル（6433 億ペソ≒1 兆 5135 億円）、さらにフィリピン政府として 554 億ペソ（約 1288 億円）の復興予算を確保した。日本からも 5150 万ドル（22 億 1500 万ペソ≒52 億円）の資金援助と 1000 人を超す自衛隊員が救援活動にやってきた。

ちなみに、これら支援資金を 1000 万人被災者に均等に分配すれば、1 人当たり 15 万円、1 家族 5 人とする合計 75 万円になり、フィリピンではこれだけで数年分の生活費に相当する。全半壊の家の数（114 万）で割ると 130 万円で、すべての家を建て直すことができる。これらのお金をいかに有効に分配できるかが鍵だ。

義捐金は途中で消えてなくなるもの

マニラの街では義捐金を呼びかける姿はなく、庶民は親戚や知り合いに支援の手を差し延べるものの、公的機関に義捐金を出すことにはさほどの興味は示さない。仮に現金を送ったところで、被災者に届くのはごく僅かで、途中で消えてなくなることを誰もが知っているからだ。国際的支援も、約 150 億ドル（約 1 兆 5000 億円）のうち資金援助は約 35 億ドル（約 3500 億円）で、残りの 115 億ドル（約 1 兆 1500 億円）は物資援助などだ。

2006 年 11 月 30 日、ビコール地方を襲った大型台風レミン（台風 21 号、国際名ドリ

アン) は私の農場のあるアルバイ県などに甚大な被害をもたらしたが、私のビジネスパートナーは集まった義捐金約 32 万ペソ (約 80 万円) を使い、テント、米、缶詰、乾麺、T シャツなどを購入し、約 1300 の袋に詰めて配布した。こんな時、現金をバランガイ (フィリピンの最小行政単位) などに渡したとしても、決して困っている人には届かないというのがパートナーの意見だった。

地球温暖化の影響はどこまで？人間は対処できるのか

このとき私は台風の翌々日に現地に乗り込んだ。電信柱や倒れた木々で交通は遮断され、葉を落とした椰子の木で禿山のような大地に建つ家々は屋根を飛ばされ、台風の凄まじさを示していた。マヨン火山の斜面に積もった溶岩が大雨で流れ出し、土石流となって河岸の家々を押し流し、多くの死者を出した。このときの風速は 60m/s (メートル/秒) を超えていたと推測される。土石流の他には水害がなかったので、家が破壊される被害は局所的なものだった。

しかし今回のヨランダは、風速 90m/s という桁違いの暴風雨に加え、5 メートルに達する高潮が襲った。東日本大震災のように、やはり水害が壊滅的被害をもたらす。レイテのタクロバンに被害が集中したのも湾の奥に位置しているためで、三陸地方が津波で甚大な被害を受けたのと同じだ。

地球温暖化の影響といわれるこのような桁違いの災害は、フィリピンや日本ばかりではなく、これから世界中で頻繁に起こるのではないか。これに対して如何に対処すべきか、あるいは対処できるか、根本的に考え直す必要があるのではないか。

超大型台風 30 号がフィリピンを直撃！【その 2】(2013-11-20)

超大型台風 30 号 (国際名：ハイヤン、現地名：ヨランダ) が直撃したとき、レイテ島で一時音信普通になっていた退職者の五十嵐忠幸さんが、台風から 9 日目の 11 月 17 日 (日)、パスポート受け取りに事務所を訪問された。

五十嵐さんは 16 日 (土) にレイテ島のオーモックからセブ島に船で渡り、翌日セブ空港からマニラに戻ってきた。

フィリピン人妻はただひたすら祈り続けた……

ビザの発行を待つ間、五十嵐さんは 3 週間ほど、奥さんの実家のレイテ島オーモック市 (タクロバン市の南西約 50km) に建てた家に滞在していた。台風が襲った 11 月 8 日 (金) タクロバン空港からマニラに戻り、ビザを受け取り 10 日 (日) 日本へ戻る予定だった。

7 日 (木) オーモックから航空会社に連絡したところ、8 日 (金) のフライトはキャンセルの可能性が高く、9 日 (土) のフライトに変更し、7 日中にタクロバン移動の予定を思いとどまった。

8 日の早朝から強風が吹き始め、超大型台風がサマル島、そしてレイテ島に上陸した。もし強風と高潮で壊滅的被害を被ったタクロバンに移動していたら、家族全員の生命はなかったと五十嵐さんは振り返る。

早朝 7 時ごろから吹き始めた強風は、9 時ごろ最大となった。窓ガラスが割れ、家の中のものは風雨に飛ばされ、1 メートル先も見えなくなった。フィリピン人の奥さんルシベルさんは、ひたすら神に祈りを捧げるだけだった。強風は午後 2 時ごろまで

続き、いったん収まったが、30 分後には方向を変え更に強烈な風が吹き始めた（台風が目が通過したのだろう）。

家は頑丈に作ってあったが、屋根が吹き飛ぶ代わり天井が屋根の骨組みとともに落下した。奥さんはヘルメットをかぶり部屋の後片づけを始めたが、五十嵐さんは屋根の修復にどれだけお金がかかるのか、懐が心配になったそうだ。

レイテ島の 9 割近い家の屋根は吹き飛ばされた！

翌朝、外に出ると、電柱は薙ぎ倒され、9 割近い家の屋根は吹き飛ばされていた。強烈な竜巻が過ぎ去った後のようだったが、タクロバンのような高潮がなかったけりまじだった。木造の家は跡形もなく、ブリキの屋根は悉く吹き飛び、辛うじて残っているのはコンクリート製の壁だけだった。

水は雨水だけ。停電でテレビもネットも使えない。

人々は濡れた衣服を乾かし、散らばった残材で家の修復を始めていた。こんな災害のあとでも、いち早く復興の槌音が聞こえるのは逞しいかぎりだ。

しかし水には困ったと五十嵐さんという。雨水に頼るしかなく、雨が降ると感激し、有りっ丈けのバケツを集めて水を貯める。まさに自給自足の生活。

台風が過ぎ去った後はもちろん停電で、電気は来ない。フィリピンでは凍え死ぬ心配はないのが不幸中の幸いだが、電気が止まるとテレビもインターネットも使えず、情報が遮断されてしまう。

停電に備えバッテリーを準備していたのが大いに役立ったという。ジェネレーターを買いに行ったが、売れ切れで入手できなかった。

治安維持のためか、早々に軍が登場

NPA (New Peoples Army 新人民軍) が民家を襲い略奪しているとか、刑務所から囚人が逃げだしたとか、治安が悪化している情報が流れ、電気のない夜は不安でならなかった。

屋外設置のセンサーが一つだけ残っていて、夜中に猫などに反応してしばしば警戒音を発する。普段なら無視するところが、この時ばかりは妻名義で買った拳銃を持って見回りに出た。意外と早く軍がやってきたが、暴徒の略奪から一般市民を守るためだろう。

今回はサマールとレイテ島など、中部フィリピンをマンモス級の台風が襲ったが、それが私の農場のあるビコールだったとしても何の不思議もない。こんな台風に襲われれば、いくら家を補強しても無駄な努力でシェルターを作り逃げ込むしかない。強風と水害、それにマヨン火山の噴火による土石流に耐えうるシェルターはどんなものか考慮中だ。

家は作り直せばいい。そもそもフィリピンの地方では、家の作りが簡単なので、すぐに吹き飛ばされる代わり復旧も簡単にできる。一方、インフラが整い高層ビルの立ち並ぶ大都市ほど災害の被害は壊滅的となり、復旧に莫大な金と時間がかかる。

仮に今回の台風と高潮がセブあるいはマニラを襲ったら、国家の存亡に関わる大惨事となっていただろう。

【緊急レポート】超大型台風 30 号がフィリピンを直撃！(2013-11-13)

11 月 6 日(水)フィリピンに帰国した翌日、超大型台風 30 号(国際名：ハイアン、現地名：ヨランダ)がフィリピン中部のサマール、レイテそして私の農場があるビコール地方に向かっているとの情報が入った。

運転手のボボイが「農場のファームハウスは耐えられるだろうか」と心配している。2006 年、ビコール地方を直撃した台風レミン(国際名：ドリアン)によって、私の農場のファームハウスの屋根が吹き飛び大きな被害を被った。

川沿いのスクーター(スラム街)はマヨン火山から流れ出た土石流に流され、数千人の死者が出た。屋根の修理にあたり台風対策は十分取ったつもりだったが、台風レミンをはるかに上回る超大型台風では一体何が起こるか見当もつかず、ただあの時の光景が甦がえった。

翌日 7 日(木)のマニラ新聞によると、中心気圧 920hPa(ヘクトパスカル)、最大瞬間風速 80m(メートル)、上陸する頃にはそれぞれ 900hPa、85m と、大きな台風に発達することが予測されていた。

更に 8 日(金)の新聞では台風は東サマールに上陸する見込みで、上陸時には 895hPa、90m という生涯でも聞いたことのない猛烈な勢いになると報じられた。

幸い農場が位置するビコールへの上陸は免れたが、その後の進路によりマニラも危険区域に含まれているので予断は許されなかった。

被災者数は 1000 万人に上る可能性も

マニラ、パラニャケに在住する退職者 A さんから、数回に渡り警戒を促すメールが入った。曰く「今、これまで経験したことのない台風がやってくる。90m という風ではすべての窓ガラスが破壊される。部屋の中にも安全ではない。窓のないトイレなどに逃げ込むべきだ。地上にあるものはすべて空を舞い、吹き飛ばされる」と。

マニラにもっとも近付くのが 8 日(金)夜半ということで、耳を凝らしながら風音が強まるのを待った。しかし強めの雨が降っただけで、何事もなく過ぎた。台風はマニラのはるか南を通過した模様で、マニラ首都圏はほとんど影響がなかった。

9 日(土)の新聞ではサマールとレイテの被害を、事前に 75 万人が避難したため、死者は 3 人で済んだと報じていた。しかしこの報道は、たんに通信網が破壊され状況が把握できなかっただけで、1 日経った 10 日(日)の新聞では死者 138 人と報じた。

それが 12 日(火)では、台風の直撃を受けたレイテ島の州都タクロバンは壊滅的な被害を受け死者・行方不明者は 1 万人に達し、被災者の数はフィリピンの人口の 1 割に迫る 1000 万人に上る可能性があるという数字になっている。テレビに映し出される光景は高潮の被害もあいまって、まるで東日本大震災のようだ。

10 日が日本への帰国予定だった退職者とも一時連絡がとれなかったが……

台風が上陸した 8 日(金)、タクロバンからマニラに戻ってくる予定のビザ申請中の退職者がいた。

彼から前日の 7 日(木)朝、「8 日(金)の朝の便が台風の影響で夕方に変更された。10 日(日)に帰国予定なので退職庁からパスポートを受領できない。どうにかできないか」と連絡があった。

そこで私は退職庁に掛け合い、緊急事態につき、本来は本人が受け取らねばならぬ

パスポートを私が預かり、退職庁に代わり 9 日(土)引渡し手続きをすることになった。

9 日(土)面会の予定だったが、予定が過ぎて何の連絡もない。タクロバン空港は閉鎖されているからマニラには来れないだろうし、通信網も破壊されて連絡も取れない。安否が気づかわれた。

12 日(火)午後、ようやく電話連絡があり、レイテのタクロバンから船でセブに渡り、マニラに戻るつもりとのこと。いつになるかわからぬが、マニラに到着後、連絡するとのこと。無事で何よりだった。

台風 25 号(国際名:バージニア、現地名:サンティ)は 10 月 12 日、ルソン中央部に大きな被害をもたらした。26 号、27 号はフィリピンをかすめ日本に向かい、幸い本州直撃は免れたが大島が大きな被害を受けた。

このところ超大型台風が目白押しで、地球温暖化の影響といわれる。フィリピンと日本は台風の影響という意味で同じ危険性を共有しており、お互い他人ごとではない問題だ。

今回の災害にはフィリピン政府をはじめ世界各国から支援の手が差し伸べられつつあるが、一刻も早く復興して欲しい。

フィリピン経済の底力 (2013-10-30)

家族のために働く海外出稼ぎ労働者たち

今のままではフィリピンの GDP (Gross Domestic Product: 国内総生産) はベトナムに抜かれ、いずれカンボジアにも抜かれるという人がいる。戦後、東南アジアの雄であったフィリピン経済は、マルコスが腐敗政治にうつつを抜かす間、タイ、マレーシア、インドネシアの後塵を拝することになったが、ベトナムやカンボジアと比較されるようになるとは意外だった。

しかし、地方はまだしもマニラ首都圏、特にマカティの建設ラッシュには目を見張る。マカティだけでも 20 件程度の大型コンドミニアム建設プロジェクトが動いている。一体これだけのコンドミニアム・ユニットを誰が買うのか。庶民の購買意欲が沸騰しているともいえる。

これらコンドミニアム・ユニットは 25 ~ 50 m²(平米)と小型で、価格も 200 万 ~ 500 万ペソ(400 万 ~ 1000 万円)と中間層に手が届く範囲に設定されている。一方、かつて盛んだった富裕層向け大型コンドミニアム・ユニットは影を潜めている。

海外出稼ぎ労働者の送金だけで国民全部を養える！

リーマン・ショック以降、フィリピン経済を牽引していた海外投資が冷え込み、既存の日系会社駐在員も激減し、マカティのカラオケでは閑古鳥が鳴いていた。従来の主要産業であったバナナ、パイナップル、ココナツなどの農産物輸出では一国の経済を維持できない。そうなるとフィリピンは不況の真っ只中にいるはずだ。

しかし、忘れてならないのがフィリピン最大の産業 OFW (Oversea Filipino Worker = 海外出稼ぎ労働者) の存在だ。国民の 1 割が海外で暮らし、フィリピンへの送金は軽く年間 1 兆円を超え、フィリピン国家予算に匹敵する。この金額は公式な送金だけで、地下銀行経由の送金を加えるとその倍になるという。

仮に 3 兆円の外貨が毎年流入すれば、約 9 千万人の国民で割れば、1 人当たり 3 万 3000 円になる。子どもも含め 1 家族 5 人とする、年間 17 万円、月々 1 万 4000 円(約

7000 ペソ) の収入となり、これで家族の生計が成り立つ。すなわち OFW の送金は国民全部を養っていける金額に達している。

これらは国民に平均して配分されるわけではなく、貧困層の一掃にはならないが、家族から 1 人の OFW を出せば、家族は安泰で中間層の仲間入りをし、コンドミニアム・ユニットの購買層にもなる。

フィリピンの GDP に、この OFW の海外送金は考慮されているのだろうか。フィリピン国内の生産の結果ではないから、GDP にカウントすることはできない。だから「フィリピンでは GDP = 購買力」ではない。仮にフィリピン国内の経済が破綻しても、OFW の送金で国民全部が生き延びていける。

家族の絆がフィリピン経済を支える！

遠くはアジア通貨危機、そしてリーマン・ショックでもフィリピン経済は殆ど打撃を受けなかった。「何故？」と聞くと、「フィリピンはずっと不況で、リーマンだろうと何だろうとこれ以上不況にはならない。フィリピン人は貧しさに慣れているから、食物が半分になっても家族で分け合って生きて行ける」と力強い回答だった。これが飽食と他力本願に慣れきった日本人ならどうだろう。

フィリピンには、莫大な外貨が全世界からコンスタントに流入している。ドバイのバブルがはじければ OFW はサウジに向かうなど、収入の糧をグローバルに分散する究極のリスク管理ができています。

フィリピンでは平日の昼間から街角でブラブラしている若者を多く見かける。こんなに働かない人間が沢山いて、どうやって食べているのだろうかといつも訝しく思う。しかし何時かは OFW となり、ブレッド・ウイナー (Breadwinner 大黒柱) として家族を支える日を夢見ている。それまで世話になった家族を決して裏切らず、海外に出て働くチャンスが来れば仕送りしながら、フィリピンに残された家族を養っていく。

まさに、フィリピン経済の底力は、この家族の絆にある。

変貌するマニラのカラオケ・クラブーその栄枯盛衰 (2013-10-22)

マカティのカラオケ・クラブ「アカシア」が 2008 年、250 万ペソ (約 625 万円) で売りに出された。「アカシア」といえば、1980 年代後半から 20 年以上営業を続けてきたカラオケの老舗中の老舗だ。

マカティアベニュー沿いの「大好き」「ナポレオン」、パソンタモ通りの「夢の中へ」「カルチェ」などと共に、数少ない家族的カラオケのひとつだったが、現在も生き延びているのは「夢の中へ」くらいだ。いまはマニラの下町エルミタ地区やマカティのパサイロード沿いの大型ショークラブ的カラオケが隆盛で、カラオケよりショーを見に行く雰囲気強い。

カラオケ嬢 GRO には日本語が必須

長年、フィリピン駐在の日本人企業戦士を慰め続けてきたカラオケも栄枯盛衰が激しく、生まれては消え、消えては生まれる歴史を繰り返してきた。最近ではジャパユキさんが日本に行けなくなり、日本語の話せる GRO (Guest Relation Officer ホステス) が激増し、カラオケ嬢の大半を占めている。

1990 年代、マカティのカラオケは駐在員用、エルミタ地区のカラオケは観光客用と棲み分けられていた。最近では企業の接待費が絞られ、マカティのカラオケも観光客を相手にしないと生きていけなくなった。かつてマカティには殆どいなかった日本語を話せる GRO だが、いまや日本語必須となっている。ほぼ全員が日本のどこかで働いた経験がある。

観光客相手のカラオケは「イリュージョン」「アップステージ」「ブルーエンジェル」「シアワセ」「ニュー・サチ」など、パサイ通りあるいはパソントモ通り沿いの大型店が主体で、昔ながらの駐在員相手のカラオケは隅でひっそり営業を続けている。

同伴カラオケが勘違いのもと？

日本人駐在員がフィリピーナと仲良くなる機会は、カラオケくらいしかない。普通のオフィスレディは鼻も引っ掛けてくれない。しかしカラオケはビジネスだから、GRO は得意のホスピタリティを発揮し、優しく応対してくれる。これがお互いに大きな勘違いを呼び、本当の恋人同士になってしまう。

カラオケは長年、駐在日本人男性の恋人予備軍を供給し、幾多の恋物語を生み出してきた（日本人用カラオケは、決して女性を連れ出しホテルへ連れ帰る場所ではない）。

同伴という制度が日本から導入され、店は積極的に客との同伴を奨励している。最低週 1 回の同伴を義務づけているところもある。達成できねばクビとか、厳しいノルマを課している。

この同伴が勘違いを呼び起こす切っ掛けのような気がする。50 歳過ぎのおじさんと 20 歳前後の小娘が、恋人同士のように食事する姿は奇妙な光景だ。初めから 1 対 1 の同伴は気が引けるのか、女性は必ず 2 人でやって来る。だから 2 人分の食事をご馳走しなければならない羽目になる。

GRO は同伴のノルマを達成するため、携帯電話を駆使する。馴染みの客には朝昼晩と 1 日 3 回、それぞれ 10 通近いメールを打つそう。メールは 1 回 1 ペソ（約 2.5 円）だから、かなりの出費だ。

文面は“How are you?” “Did you finish your dinner?” “I miss you, Take care.” など、決まり文句の繰り返しだ。偶に“I love you.” など心にもないメールを送る GRO もいる。

一族の生活を背負う GRO たち

料金体系は店によって千差万別だ。「500 ペソ（約 1250 円）均一」「飲み物無料」「延長無料」などが謳い文句。その代わり余計なものが付いたりして、結局払うお金はどこも同じ。2～3 時間程度で、1 人当たり 1500 ペソ（約 3750 円）～ 2000 ペソ（約 5000 円）といったところ。明細を見てもごたごた書いてあり何がなんだかわからない。

レディースドリンクを黙ってじゃんじゃん出したり、延長時間が来ても黙っている店は、ボラれると思っていい。途方もないお金を取られるわけではないが、相場の 2～3 倍というのは稀にある。

GRO の質も千差万別。吃驚するような美人も偶にいる（大きな店にひとりは）。

殆ど GRO が高卒か大学中退だ。学費が払えず大学に行けず、一族郎党を背負っているのだと思うと、頭が下がる。そういう GRO のお尻に手をやりニヤけているオヤジは張り倒したくなる（自分のことかも）。

マラテ・エルミタ地区には「カラ置屋」と称される連れ出し可能なカラオケクラブがある。カラオケとゴーゴークラブのシステムを併せ持ち、一見普通のカラオケと変

わからないが、ママが「Take out しますか」と聞くのでそれとわかる。かつてマビニの「ダンヒル」「鍵」「サンパギータ」などが有名だった。

カラ置屋は店の規模の割りに女性の数が多く、店いっぱい女性ばかりという感じだ。客が GRO をどんどん連れ出すので、店が空にならないよう大量の女性を置いておく。最近はあまり流行らないようで、大規模なカラ置屋は影を潜め、今は細々と営業を続けている。

すでに定番！フィリピンで人気の日本の商品(2013-10-11)

ヤクルトおばさん、フィリピンの街に行く

まだ自分が子どもの頃、街でヤクルトおばさんを見かけることが時々あった。ヤクルトを家や会社に配達して回るのだ。

最近フィリピンの街角でヤクルトおばさんをよく見かける。ヤクルトはコンビニやスーパーでも大きな顔をして売られている。手頃な大きさなので子どもたちも大好きだ。5 本で 48 ペソ（約 120 円）、1 本 10 ペソ（約 25 円）近いから、決して安い飲み物ではない。

ヤクルトは乳酸菌飲料でおなかの調子を整えるサプリメントだ。だが子どもたちは、放っておくと冷蔵庫を開け水代わりに何本でも飲み、親も黙って見ている。体に悪くはないだろうが、違和感がある。ヤクルトとしても、たくさん売れて嬉しいかもしれぬが本意ではないはずだ。

日本製がやっぱりおいしい？

ヤクルトは日本のビジネスモデルをフィリピンなど新興国に持ち込み成功したが、他にもフィリピンに根付いた馴染みの食品類がある。筆頭は日清のカップヌードルだ。小が 19 ペソ（約 48 円）、大が 26 ペソ（約 65 円）と格安だが、日本のとはだいぶ味が違う。だからフィリピン人も、日本からの輸入品を好んで食べる。輸入品は 100 ペソ（約 250 円）程度と 4 倍もするのに。

日清のカップヌードルは、ジャパゆきさんにも懐かしい日本の味だ。彼女たちは日本で稼いだお金のお半をフィリピンの実家に送ってしまう。いつもひもじい思いでカップヌードルばかり食べていた。偶に鼻の下の長い客に誘われると、憧れの焼肉を食べ栄養をつけた。

今でも、日本からのお土産と言えは口を揃えて「日清のカップヌードル」と答え、フィリピンで食事に誘えば焼肉と相場が決まっている。フィリピンの空港で預け入れ荷物を待っていると、決まって日清のカップヌードルの箱がベルトに乗って出てくる。

味の素、リポビタンは庶民の味方

さらにフィリピン庶民に定着しているのが、日本で余り見られなくなったお椀のマークの味の素だ。フィリピンでは欠かせない調味料となっている。

はじめはビン入りだったが、売れないので小口のパックにしたら飛ぶように売れ出した。小が 5 ペソ（約 13~14 円）、大が 10 ペソ（約 25 円）。1 回の料理に必要な分だけ入っているのも、その日暮らしの庶民の味方となり、塩、胡椒、砂糖、調理オイルなどと共にサリサリ（Sari-sari store 街の小売店）の定番商品になっている。

風邪をひいて体調がすぐれない、あるいはちょっと無理をしたときに頼りになるのがリポビタンだ。私の世代では王貞治選手の宣伝でお馴染みの精力剤だが、当地のものは単に「LIPOVITAN」という。一度「リポビタン D を買ってきて」と頼んだら、どこにもなかったと帰ってきた。LIPOVITAN ならどこのサリサリにもある、やはり定番商品なのだ。ちなみに値段は 1 本 35 ペソ（約 88 円）。

マニラの交通規制は複雑怪奇? (2013-10-3)

原因はMMDA（マニラ首都開発庁）の横暴非道

タクシー運転手でもわからない道路事情

マニラではやたらと一方通行が多い。左折する時は、左折できる交差点を探すのが大変だ（フィリピンでは車は右側通行なので、右折禁止ではなくて左折禁止が多い）。

これがマニラの道路を複雑にしており、ドライバー泣かせとなっている。交通規制がない場合と比べて、道を覚えるのに 10 倍程の労力が必要ではないだろうか。

マニラ在住 10 年以上のベテラン 3 人が、新しいレストランに自力で行こうとしたら、一体どこを通ればそこへ行きつけるか、喧々諤々の議論になってしまう。

交通規制までも網羅した気の利く道路地図もない。行きと帰りでは道順が違ふし、時間帯で規制が変わってしまうこともある。せいぜい自宅と事務所、行きつけの食堂など、数点を結ぶ道路を覚えるのがやっとだ。

だから、通いなれた通勤路をタクシーでいく場合、道順を教えてやらねばならない。例えプロでも慣れてなければわからない。

車のナンバーの末尾で、週に一度運転できない日も

そんなドライバーの弱みに付け込んで、間違いやすい場所には交通警察が隠れていて、車を止め得意げに交通違反を告げ免許証を要求する。大概の場合、免許証に 500 ペソ（約 1250 円）札を忍び込ませ無罪放免となる（フィリピーノなら 100 ペソ=250 円程度が相場）。

酒気帯び運転やスピード違反は殆ど取り締まらない。これらの違反を捕まえても、証明に手間がかかり小遣い稼ぎとしては割に合わない。

交通規制を実施しているのは MMDA（Metropolitan Manila Development Authority マニラ首都開発庁）という機関だ。

MMDA がマニラの交通を複雑にしているため、道順が限定され、到る所にボトルネック（Bottleneck=ビンの首）が生じ、交通渋滞になる。すぐ近くに行くにも大回りしなければならず、ガソリン代もバカにならず大気汚染の原因にもなる。

あげくの果て交通混雑解消に、車のナンバープレート末尾番号で、週に一度運転できぬ日をもうける（カラーコーディング Colorcoding=色分け）など、市民いじめを楽しんでいるとしか思えない横暴非道ぶりだ。

マニラでは車を持つ贅沢は諦め、ジープニー、トライシクル（サイドカー付きバイク）やパジャック（サイドカー付き自転車）を利用し、慎ましい市民として生きて行けということか。

あるいは究極のエコカー、馬車にでも乗ったらいいかもしれない。マニラの下町チャイナタウンでは、いまだに馬車が現役で活躍している。

フィリピーノの五つの「あ……」と五つの愛(2013-9-25)

「焦らない」「諦めない」「頭にこない」「当てにしない」「甘やかさない」は、フィリピン人との付き合いで大切な五つの「あ…ない」だ。

これは先達の名言だが、それに加え更に五つの「あ……」を紹介したい。

1. あとで (mamaya マーマヤ)

何か頼むといつも答えは「後で (マーマヤ)」。

忙しくないのに、何故「後回し」か理解に苦しむ。

いつやるのかと思っていると、いつまでもやらない。催促すれば又「後で」と同じ答が返ってくる。「何故やらない」と責めると、「うるさい (makulit ka マコリット・カ)」と逆襲される。

期限ギリギリに慌てて始めるが、もはや手遅れが多々ある。いつまでもやらないので、仕方なくこちらが自分でやる。敵はきっと「初めから自分でやればいい」と思っている。

2. あとわけ

遅れたり、忘れたり、何か失敗をしても、それは初めから必然で自分に責任はないという「あとわけ (後の言い訳)」をする。

書類を日本に送ってもらおうと、タイプした日本の住所を渡して郵便局に行かせる。戻って来た伝票の住所が違う。町名が抜けている。こんな時「住所が長すぎて落ちてしまった。郵便番号があるから問題ない」と、ミスを決して認めない。

書類は届いたからよかったが、送り先不明で戻ってくれば、費用と時間のロスだ。日本への EMS (Express Mail Service 国際スピード郵便) 料金は 717 ペソ (約 1800 円) で、彼らの 2 日分の給与に匹敵する。

3. あと払い (Utang ウタン借金)

サリサリ Sari-sari (ストア) やトロトロ Turo-turo (食堂) では「付け売り」が一般的で、個人間の取引も現金払いは殆どなく「あと払い (Utang ウタン)」が当たり前。

お金を貸したら戻ってこないと思ったほうがよい。「あと払い」も踏み倒されることが多い。

「こんな商売は儲かる」「農地を買いこんな作物をつくれば儲かる。まず金を出して」などと、儲けは「あと払い」で、数万円から数十万円の出資を持ちかけられた人も多い。果たして何人が出資金の配当あるいは返済をしてもらっただろう。

「くれ」というのは恥ずかしいから「貸してくれ」「出資してくれ」というが、実際はもらったものと思い、自分たちの生活の足しにしようとしているだけだ。彼らは「本当に戻ると思っていたのか」と心中呆れているだろう。

4. あと少し (Malapit na マラピット・ナ)

フィリピン人の時間のルーズさに、殆どの人は頭にきた経験があるだろう。約束した時間を過ぎているので、電話で「いつ来るのか」と催促すると、決まって「あと少し (マラピット・ナ)」と答える。

すぐ近くに来ているはずなのに、30 分後にも現われない。歩いても 10 ～ 20 分くらいの所を、何故 30 分もかかるのか。

「あと少し」を決して信じてはいけない。そのうち来るだろうと、マイペースで他の事をしながら気長に待つか、自分も遅れていくことだ。

5. あと片付けをしない

事務所や部屋をフィリピーノが使ったらすぐにわかる。パソコンを使っても「あと片付けをしない」ので、色々な設定を自分でやり直さなければならない。

他人のものを使ったのだから「元に戻しておこう」とは決して思わない。「やったらやりっぱなし」が、フィリピン流だ。

これを責めると「マコリット・カ」と逆襲される。「お前は親切心で貸してくれた。序でに元へ戻すことも自分でやれ」と。

フィリピーノの心に宿る五つの愛

フィリピン人の心は奥が深く理解するまで数十年の月日を要する。しかし我々日本人にとってネガティブな面ばかりではない。愛すべきフィリピーノをこき下ろしたので、フィリピーノの心に宿る、日本人に最早失われた「五つの愛」を紹介する。

- 1) 切っても切れない家族の深い絆、家族愛
- 2) お年寄りとおちゃんを心から愛し大事にする、弱者への愛
- 3) 自分の食物がなくてもご馳走で人をもてなす心、隣人への愛
- 4) その日、家族一同が食事できただけで幸せを感じる感謝の気持ち、神への愛
- 5) 男女の愛に年齢は関係ないという、純粋な愛
(ただし、女性が大幅に年上の場合は道徳に反する)

フィリピーノにモテる五つのコツ(2013-9-13)

フィリピンに住めば矢張りフィリピン人に好かれたい。皆に好かれて愛されれば、何かあっても守ってくれ安心だ。病気や、経済的困窮も皆が助けてくれるだろう。

日本では気にしないことが、厭がられたり嫌われたりする。逆にどうでもよいと思っていることが、感謝されたりする。「悪いことをすれば叱られるのは当たり前」「借りたものは返せ」「ウソは泥棒の始まり」など、道徳教育で仕込まれた日本の倫理・常識は日本に置き、この際フィリピーノ流をしっかりと身に着けよう。

1. マバゴ mabango とマバホ mabaho (香りと臭い)

フィリピーノは臭いに敏感で、体臭と口臭をことのほか嫌う。出がけには必ずシャワーを浴び準備万端整える。フィリピンで体臭や口臭を感じさせる人にはまずお目にかからない。欧米やアラブ、インド人などと比べれば遙かに清潔な日本人でもかなりの確率で臭う人はいる。

老臭にはクエン酸を多く含む食べ物、梅干などが効果がある。またパセリを常食する人に口臭はない。タバコや酒で臭い人は多いが、フィリピン人はこれさえもない。

フィリピーノが鼻の下を人差し指で擦ると「臭い」意思表示で、最大の侮辱の表現だから、その場から離れ去るがよい。モテるコツの一は「いつも清潔、臭いは大敵」。

2. マバエット mabait (優しい)

「理想の男性像は？」と聞くと、最初に出るのが「優しい人」。いつも笑顔、怒っても笑顔、遅れても笑顔、文句を言うときも笑顔、笑顔を絶やしてはいけない。

仕事で部下にややこしいことを質問する時、難しい顔になってしまうが、相手はそれを「怒っている」と受け止め、構えてしまう。あるいは怖くなり、言い訳から始め

まともな答が返ってこない。そんな場面でも笑顔を交えて話せば、相手もリラックスして協力的になる。

笑顔以外の表情はこの国では不要。モテるコツの二は「いつも笑顔で優しく」。

3. 人前で怒らない、叱らない、文句を言わない

仮に相手がミスをしたとしても、他人が側にいる場合は決して怒ってはいけない。優しく注意するだけで十分。

どうしても言いたいことがあれば、二人きりになったとき話す。何故いけないかじっくり分かり易く説明し、話の初めと終わりに相手を褒める言葉を付け加える。

人前で文句を言ったり叱ったりしても、相手は周囲の目を気にして、屈辱感で一杯になり、こちらの言うことを聞かない。いかにこの場を逃れるか、どうやって復讐するかしか考えていない。

日本では妻や子どもを人前で叱責するのは普通だが、フィリピンでそれをやれば一巻の終わり。恋人なら、もう二度と会うこともない。モテるコツの三は「人前で怒らない、叱らない」。

4. ケチらない (ケチ kuripot コリポット)

フィリピーノにとりケチは罪。あればあるなり、なければないなりに気前よくなくてはいけない。自分だけよければ回りはどうでもよい、という自分勝手は許されない。

自分が何か食べている最中、知り合いが通りかかれば「食べませんか (Kain ka na? カイン・カ・ナ)」と勧める。喜びは皆と分かち合うのがキリストの教え。

あればあるだけ使い果たして分け与え、宵越しの金は持たない。明日は明日の風が吹く。これがフィリピン流。

彼女や妻の友だち、家族や親戚がやってきたら、大いに振る舞ってやろう。彼らはいつも腹が減っているから、「ケチらず、いつも食わせてやる」のが、モテるコツの四だ。

5. パサルーボン Pasalubong (お土産)

ジャパユキさんがフィリピンに戻るときは、ダンボールに大量の物資を詰め込んで帰る。すべて家族や親戚、友だちへのお土産 (パサルーボン) だ。

お土産を買えなければ、フィリピーノは故郷へ帰らない。海外渡航、旅行あるいは里帰りにお土産は必須で、それがないと家族や親戚にそっぽを向かれる。お土産の山を前に至福のひと時を家族で味わう。

だから機会あるごとに「お土産を渡す」のが、モテるコツの五だ。

日本では釣った魚にエサをやらないと言うが、フィリピンではそうはいかない。釣った魚にもエサをやらないと、すぐ逃げ出してしまう。バレンタイン、誕生日、結婚 (恋愛) 記念日、クリスマスの年 4 回、真っ赤なバラの花束をプレゼントするのは必須。そして毎日「I love you」を 10 回囁く。これが愛する人への礼儀だ。

これが 1 から 5 までのモテるコツの凝縮なのだ。

フィリピーノはけっして遊びでセックスはしない。いつも真剣勝負。セックスは男と女 (恋人あるいは夫婦)、家族そして社会を築く根幹だから気合が入っている。だから「すぐに子どもがほしい」と言い出す。

「相手が同意したから愛もないのにセックスした」「ただそれだけ」なんて理屈は通らない。言葉巧みに誘い、愛がないのにセックスしたら、それは強姦と同じ。愛のないセックスなら金で買えばよい。タダでやったと喜んでいたら、手痛いしっぺ返しを

食らい、タダより高いものはないと痛感する。

マニラ・美形ゆえ、たらい回しに！(2013-9-6) 働いて妹を養う、美少女・デバイン奮闘記

ホリーウイーク Holy Week（聖週間）休暇でタバコ市の農場を訪れた折り、空港のあるレガスピ市のカーネル（仕事の相棒ジェーンの夫）の実家に泊まった。折角の機会なので、夕食にレガスピ港脇の新しいモール（イン・バルカデロ・デ・レガスピ）に出かけた。そのファストフード店 INASAL（イナサール）で、今回の話の主人公デバインが働いている。

私は 2002 年レガスピ近郊のタバコ市に農地を購入し、終の棲家として農場と住居を建設した。そのとき私の食事の世話をしてくれたのがデバインだ。

彼女は当時 12 歳だったが、すでに顔も身体も大人で、男心をくすぐるものを持っていた。インド人との混血で（当時はアメリカ人との混血と聞いたが、その後インド人だと判明）、大きな目と整った顔つきのかかなりの美形だった。今回久しぶりに会うと、まだ若干 21 歳ながらかなりの重量級で、ダイエットを強く勧めておいた。

美形ゆえに、たらい回しに

彼女の母親はジェーンのいところで、若い時からパロパロ Paruparo（浮気者、蝶々の意味）で、結婚前から異国籍のボーイフレンドの子どもをつくり続けた。その挙句フィリピン人と結婚後、それまでの子どもの面倒を見られなくなり、しかもその頃、祖母が亡くなり、デバインは親戚をたらい回しにされる羽目になった。

行く先々で、預かった家の亭主が美形をちやほやするので、女房がやきもちを焼き追い出されてしまう。フィリピンでは再婚した妻の連れ子が成長すると、亭主が無理やり手箒めにすることがまかり通っているようで、義理の父親とて油断できない存在なのだ。まして妻の親戚の子どもなら他所の女と同じで、妻の焼き餅はもつともだ。

そんなデバインの行きついた先が、我が農場。そこでジェーンの母親（マミー）に面倒を見てもらいながら、ハイスクールと専門学校を終えた。私は 2003 年からの 1 年半を農場で彼女と過ごしたが、そのころ彼女はハイスクールの学生だった。

農場で生活していた頃、デバインは何かと頼りにされ、私がマミーに何か頼んだり聞いたりすると、決まって「デバイ〜ン」。小言を言うと「デバイン・カセ」と彼女の所為にされ、それでも何一つ文句を言わず大きな家と農場を走り回っていた。

農場で現在、その役割を担うがビアンカで、すでに 16 歳と推定されるが立派な少女に育っている。

今は年に数回農場を訪れる程度だが、そのとき一番頼りになるのがビアンカで、家の中のことなら何でも知っており、農場の欠かせない人材だ。現在ハイスクール 3 年を終え、あと 1 年で大学進学だ。もっとも 13 人の甥や姪を抱えるジェーンに私立にやる余裕はない。ビコール国立大学に入学できたら OK だが、それが駄目なら、専門学校で何か手に職を付けさせることになっている。

毎日働いて妹を高校に。自分は大学に通う

ホテルレストラン学科を卒業したデバインは、一時ジェーンと折り合いが悪くなり、農場を出てレガスピでパン屋に勤めていたが、今は INASAL のレジ係だ。農場には偶

に来る程度で、去年の KIAN（ジェーンの長男）の誕生日と今年の正月に会った。

ジェーンとデバインはもはやまったく屈託がないようで、久しぶりの再会を喜んでいった。食事後、デバインの話を聞いたかったので、生バンドのあるパブに席を移した。

デバインは 16 歳の妹のクレヨを引き取りハイスクールに復帰させ、自分も大学に通っているという。朝 8 時から午後 3 時まで大学に通い、夕方から深夜まで INASAL で働き、寝る時間はあるのかと心配になる。

給与は 1 日 256 ペソ（約 800 円。多分この地域の最低賃金だろう）。手取り 205 ペソ（約 615 円）、毎日働いても月々 6000 ペソ（約 1 万 8000 円）。これで二人分の生活費と学費を賄うのだが、とても可能とは思えない。それでも、明るく元気に生きているの。しかもこんなに太っている——これは INASAL の「ライスのお代わり無料」というポリシーによるらしい。

「ボーイフレンドはいるのか」と聞くと、「ひとり」と恥ずかしそうに答えた。デートの金も時間もないと思うのだが。

農場では家族のように暮らしていたから、話を聞いて黙っておれるはずもない。「ジェーンには内緒」と言って、3000 ペソ（約 9000 円）を握らせたなら大喜びした。翌日、さっそく学費の支払いに充当したそう。

デバインの境遇はまだマシかもしれない。自分と妹の面倒だけで済んでいるが、病気や無職の両親、5～10 人の兄弟の面倒を一身に背負って、花街で体を売る娘も多い。

マニラ・ダンボールに捨てられた赤ちゃん(2013-8-30)

ビアンカの物語

1998 年、私の仕事の相棒ジェーンの家玄関にダンボールに入れた赤ちゃんが捨てられていた。母親が人に頼んで玄関に置き去りにしたのだ。名前も誕生日も分からない乳飲み子だった。

ジェーン家には長兄ダシンの 2 歳の子どもがいるだけだったので、家で育てることにした。とりあえずブランカ（白紙）と名付けたが、後に、一般的な女の子の名前ビアンカに変えた。色白で目の大きい可愛い子だった。

学校に入るには出生証明がないと具合が悪い。そこでビアンカは母親（マミー）の子ども、ジェーンの妹として届けられた。その後、長兄ダシンに長男、次兄アランに長女、次女と孫が生まれ、マミーの愛情も実の孫へと移っていった。そして、ビアンカの試練が始まった。

ビアンカの胸に秘められた複雑な思い

小学校へ通うようになって、ある日、学校の先生から呼び出しがあった。全然やる気がなく、他の子どもの迷惑になるから退学させたいと。結局、留年の憂き目となり、農場の近くの学校に移りマミーと暮らすことになった。ビアンカは、他の子どもが実の親に可愛がられるのを見て複雑な思いを胸に秘めていた。

ジェーンがビアンカを責めて、「一体お前は何が欲しいの」と聞いたら、ビアンカの答えは「Love」の一言だった。

いつしか一番頼りになる「子の鏡」に

学校を変わり農場で過ごすことになる、ビアンカは見違えるほど変わった。2003

～ 04 年は私自身も農場で暮らしていた。マミーとジェーンの姪デバイン、ビアンカと私の 4 人暮らしだった。

ビアンカの役割は、豚小屋の掃除や鶏のエサやり、庭掃除や食事の後片づけと休む暇もない。デバインと二人、黙々と農場と家の仕事をこなしていた。

当時、マミーは何かあると直ぐに「デバイ～ン」と大きな声で呼び、仕事を言いつけた。そして今、デバインが家を出て、16 歳のビアンカはいつもマミーに「ビアンカ～」と呼ばれ頼りにされている。

他の子どもが親の愛情を当たり前のように受けてぬくぬくと育っている間、ビアンカはマミーを助け、思いやりと責任感ある子の鏡といえる良い娘に育っていった。学校の成績も上がり表彰されるほどだった。

ビアンカ自身は自分の生い立ちを承知している。小学校時代のコンプレックスを克服し、今や大家族の同世代の子どもたちとは本当のいとお同士のように仲良くできるようになった。

推定 17 歳、ビアンカの株は急騰中

2 ～ 3 年前、実の母親が捨てたはずのビアンカを返して欲しいと言ってきた。ジェーンは「法的には相手に権利があるのではないか」と色々心配していた。しかしビアンカがマミーに、「実の母親の所に戻さないで。戻れば売春婦として売り飛ばされる」と涙ながらに訴え、ジェーンの腹は決まった。「Over my dead body」（私の目の黒いうちは絶対そんなことはさせない）と。

そんな訳でビアンカはジェーン一家の一員として、確固たる地位を確保した。私が農場に帰郷した際も一番頼りになるのがビアンカだ。

4 月のホリーウィーク Holy Week（聖週間）で帰郷した際、ビアンカがやけに大人になったことに気付いた。以前のように仏頂面ではなく、目が合うと必ずにっこりと微笑を返す。フィリピン人特有のホスピタリティーを身につけてきたのだ。

以前、子どもたちが遊んでいても余り仲間に加わることはなかった、今は積極的に皆と交わって遊んでいる。推定 17 歳のビアンカ株が急騰中だ。

あうんの呼吸で賭けが成立(2013-8-19)

フィリピン・タバコ Tabaco 市の闘鶏見物

退職者二人を案内しタバコの闘鶏見物に出かけた。闘鶏場はほぼ満員、駐車場には入りきれないオートバイが並んでいた。

闘鶏場の控え所は、多くの参加者が自慢の闘鶏を胸に抱き出番を待っている。悲しいことに、このうち半分は 1 時間もしないうちに生涯を終えることになる。

勝負は客同士 1 対 1

闘う 2 羽の闘鶏が出場すると、まず闘志を掻き立てるため、睨み合ったり噛み合わせたりさせる。

2 羽を対面させる辺りから賭けが始まる。まるで競りのような掛け声で場内は騒然となり、手振り身振りで賭け金と賭ける闘鶏のコーナーを示す。青コーナーはメロン Mayroon（あり）、赤コーナーはワラ Wala（なし）と呼ぶ。

賭け方はいたって単純。胴元はいなくても客同士 1 対 1 の勝負。闘いが始まると賭

けは終了。あとは勝敗を見守る。勝負がつくと、負けたほうが勝った相手にお金を渡してお終い。

賭け金は1階席が500ペソ（約1250円）以上、2階席が100ペソ（約250円）以上で、掛け金の10%をコミッション **commission** として闘鶏場に支払う。1回の勝負で数千ペソ（1000ペソ＝約2500円）の金の遣り取りが行なわれるから、大変な金額だ。

この間、我々には誰と誰の賭けがいくらで成立したのか、皆目見当がつかない。しかし試合が終わるとお金を渡し合い、何のトラブルも発生しない。コンピューターも使わず短時間でゲームが進行していく様は、驚き以外の何物でもない。

負けた鶏はオーナーの胃袋に……

もし賭けに参加したいと思えば、隣で大声を上げている人に頼めばいい。「メロンに500ペソ」とだけ告げ、結果を見守る。負けたら500ペソを支払い、勝てばコミッション（10%）を除いた450ペソを回収し渡してくれる。ただしチップを10%程度渡すことをお忘れなく。

闘鶏はそもそも闘争本能旺盛で、オス同士が出会えばあっという間に喧嘩が始まる。だから2匹のオスは決して一緒にできない。親指にあたる突起で相手を攻撃するが、闘鶏ではそこに鋭い刃物を取り付け戦わせる。出会い頭の一発のけりで勝負が決まってしまうことが多い。

負けた方はオーナー（あるいは負けた相手のオーナー）の胃袋に納まってしまう運命。勝った方も傷だらけになることが多いが、場外の獣医に傷口を縫って治してもらえる。

偶に相打ちで引き分けもある。決定打が出ないまま闘いが続き、双方が疲れ、どうしようもなくなることもある。その場合は10分の制限時間があり、タイムオーバーの引き分けとなる。

場内にはほとんど女性はいない。いてもスナックの売り子ぐらい。大金を儲けたり、すったたりする博打は女性の敵だ。

バードウオッチングが趣味の退職者は、闘鶏を初体験して大満足の様子だったが、果たしてこれもバードウオッチングの内に入るのだろうか。

フィリピン人妻の浮気の顛末(2013-8-12)

責められるのは男か？女か？

古い話だが、2009年8月末、大統領顧問代行（国家安全保障担当）を務めるチャベット・シンソン前南イロコス州知事（68歳）が暴行を働いたとして内縁の妻チェ（35歳）に告訴された。

シンソンは17年間、関係が続けてきた内縁の妻の不倫現場を発見し、チェとその浮気相手の男に暴行を加えた。

妻に浮気された男は「頭に糞を載せている」？

シンソンは本妻とはすでに別れているが、フィリピンの法律では裁判所の判決（Annulment アナルメント＝婚姻の無効）がなければ離婚できないので、チェとは内縁関係のままだった。

シンソンは、フィリピン刑法では「妻や夫の不倫現場に遭遇して逆上し、暴力を働

いても罪にはならない」という規定を盾に無罪を主張している。

チェは 18 歳の学生時代シンソンと出会い、以来長く関係が続けていたが、身持ちはそれほど堅かったわけではないらしい。一方シンソンも女出入りが激しく、チェにとってみれば、浮気はお互い様のようだ。

しかしフィリピンでは、妻やガールフレンドの浮気は反道徳的とされ、世間から非難を浴びる。妻に浮気された男は「頭に糞を載せている」と称され、恥ずかしくて世間に顔向けができない。

その一方、男の浮気は性（サガ）あるいは甲斐性として容認される。妻からはとことん絞られるが、結局は元の鞘に納まる。

不倫をして攻められるのは常に女

シンソンはエストラダ元大統領の不正を暴き、失脚に追い込んだことでも有名な強気の政治家だが、この事件で世間の笑いものになってしまった。妻のチェは、はしたない恥知らずの女として世間から侮蔑の目で見られた。

フィリピンではいまだに「姦通罪」が存在する。これは女性の不倫にのみ適用されているようだ。

夫あるいはボーイフレンドが浮気した場合、妻は浮気相手の女を探し出し、「夫に手を出すな」と談判する。場合によっては取っ組み合いのけんかになる。夫はそれを見ていて、喧嘩に勝った女のほうにつく。

妻あるいはガールフレンドが浮気した場合、夫は逆上し妻に暴行を加えることも少なくない。不倫をして責められるのは常に女だ。不倫の責任は男にあるとされる日本とは逆だ。

これは不公平ではないかと、相棒のジェーンに聞いてみると、「男はちゃらんぼらんで女のケツを追いかける。だから理性ある女が自分あるいは相手をコントロールしなければならない。不倫があった時は常に女に責任がある」と話していた。

日本人男性は、間違っても人妻に手を出さないよう気を付けてほしい。

お金や人の集まるところに必ずいる (2013-8-1)

フィリピン風物・セキュリティガードの賢い利用法

今回は、フィリピンの街中で見られるショットガンを構えるセキュリティガード。日本人には違和感ある景色だが、フィリピンで暮らすには大いに役立っているよう。その活用法とは？

フィリピンにきて最初にびっくりするのが、街中到处所にショットガンを構えて立つセキュリティガードの存在だ。これが「フィリピンは危険」というイメージを助長している。

銀行やポーンショップ（pawnshop 質屋）、ホテルやコンドミニウムにセキュリティ・ガードは必須だ。それ以外のオフィスビルやデパート、レストランやコンビニなど、お金や人の集まる所には必ずいる。

果たして、彼らが活躍するほど犯罪が多発しているだろうか。とてもそうは思えない。彼らが銃を使う機会は一生に一度もないだろう。犯罪がないのか、彼らの存在の御蔭で犯罪が起きないのかわからない。フィリピンの風物ないし慣習とってよいかもかもしれない。

慣れると彼らの存在ははなはだ重宝で、常にいて出入りする人間を見張ってくれる

のは、店の人、住人、客にとってはとても心強い。しかも彼らはテリトリーの中では警察権を持ち、逮捕ばかりか、場合によっては犯人を射殺できる私設の警察なのだ。

昔、事情があって私専用ボディガードを雇ったことがあった。付かず離れず 24 時間守られているのは何とも心地良く、安心できるものだった。

セキュリティガードは味方にするべし

セキュリティガード、運転手、シーマン (seaman 船員) は男の仕事の 3 羽ガラスといってよい。女性の仕事はメイド、ウエイトレス、セールスガール (売り子)、マッサージガール、GRO (ホステス) など男よりずっと多い。オフィスや工場でも男女の数は似たようなものだから、巷で所在なげにたむろしているのは殆どが男だ。

セキュリティガードは専門の会社に所属し、訓練を受け、それぞれの依頼先に派遣される。この会社を経営しているのは国家警察幹部 OB が多く、元 PRA (退職庁) 長官のゼネラル・アグリパイも大きなセキュリティアージェントを経営し、マカティやグロリエッタのセキュリティガード派遣を一手に引き受けていた。

自分の住んでいるコンドミニアムや定宿のホテル、行きつけのレストランやカラオケ、銀行や両替屋にも必ずいるセキュリティガードだが、顔見知りになるとやけに愛想がよい。

彼らはこちらの行動をいつも見守り、熟知しているので、大いなる味方とするべし。テリトリー内では個人的ボディガードの役割さえも担ってくれる。トラブルに巻き込まれたとき、顔見知りの彼らが味方をしてくれる。

そのためには、普段から仲良くしておくことが肝心。ホテルやコンドミニアムのガードならパンや飲み物を渡すとか (いつも腹をすかせている)、行きつけのレストランやカラオケでは駐車案内のお礼に 50 ペソ (約 125 円) 程度のチップをやれば、こちらの顔を覚え、第一優先で面倒を見てくれる。

「密室でのトラブル」にこそ役に立つセキュリティガード

若い時、フィリピン駐在経験のある退職者と食事をした折り、このセキュリティガードについてためになる話を聞かせてくれた。

フィリピンではレイプ (性的暴行) は死刑という恐ろしい犯罪だ。合意の上のはずなのに、相手が何かに腹を立て「犯された (Raped)」と訴えるトラブルがしばしば起こる。

密室の秘め事であるため、合意の上の行為と立証する術がない。お互いにああだこうだと言い合っても水掛け論。

そこで、セキュリティガードの登場。

コンドミニアムやホテルに女性を連れ込むとき、こそこそせず、彼女が自らの意思と一緒に部屋に入ったという証人になってもらう。ガードの前でキスくらいしてもいい。普段から仲良くしておけば、いざとなればこちらに有利になるよう、あることないこと証言してくれるだろう。

アドバイスに拠れば、「アンダーエイジ (Underage 18 歳未満の未成年者) の女の子だけは絶対手を出さないように」とのことで、合意の上でも逃げようがない。

しかしホテルでは、アンダーエイジは保護者と一緒でないと宿泊禁止なので、セキュリティガードが身分証明書をチェックし、宿泊客がトラブルに巻き込まれないよう防いでくれる。

フィリピンの花街にはなぜ美人が多いのか(2013-7-24)

魅力的なフィリピーナたちの就活事情とは？

初めてフィリピンを訪問した人をショークラブに案内すると、「ステージで踊っている女の子は何故美人ばかりなのか？」とびっくりされる。当然の話だが、街を歩いているフィリピンの女の子がみな美人というわけではない。

魅力的なフィリピーナに囲まれて舞い上がる人も多いので、何故花街に美人が多いか、その理由を考察してみよう。

ミス・ハイスクールが集まるショークラブ

一流のショークラブで女の子をテーブルに呼び「ミス・ハイスクールだったでしょう？」と聞くと、得意げに「YES」と答える娘がかなりいる。まだ18歳くらいなので、ほんの1～2年前のことだ。

フィリピンではどのハイスクールでも美人コンテストがあって、毎年、学年毎にミス・ハイスクールが決まる。「ミス・ハイスクールにはなれなかったけど、ミューズだった」と得意げに答える娘もいる。ミューズ Muse とはミス・ハイスクールの候補で、準ミスといったところ。ミスター・ハイスクールというのもあり、ハンサムな男の子が選ばれる。

コンテストは生徒の投票による。選挙運動も盛んで、両親の財力がものをいう。ミスとミスターは見てくれだけだが、学業成績優秀の子はプレジデント President（クラス委員）に選ばれる。

ハイスクール時代を謳歌した娘たちが、何故1～2年後には、禿げ親父に媚を売ったり、体を売る羽目になってしまうのだろうか。

フィリピンのハイスクールは、プライマリー・スクール Primary school（小学校）を12歳で卒業、16歳まで4年間通う。そのあとはカレッジ（大学）が4～5年間だが、花街にも偶にカレッジ在学中あるいは休学中の娘がいる。18歳ならカレッジの2～3年生に相当する。

「美人は雇うな」がビジネスの鉄則!?

美人となると、皆がちやほやして宿題や試験の答を教えてくれるので、勉強しなくても好成绩で学校を卒業できる。しかし世間に出ればそんなものは役に立たない。実力がものをいう世界だから、「美人は雇うな」というのがビジネスの鉄則で、働き口は意外と少ない。

子どもの頃から男たちにチャホヤされ、愛の告白を聞いているから、若い身空で体を許してしまう。そして妊娠。

堕胎が法律で禁止されているフィリピンでは産むしかない。学校も追い出され、処女を奪ったハンサムで無責任な男はさっさとトンズラしていない。16歳や17歳の若さで乳飲み子を抱えた元ミス・ハイスクールは花街に身を落とすしか術がない。

「身を落とす」といっても、彼女たちの稼ぎは大卒サラリーマンの2～3倍はある。だからこそ乳飲み子を抱えていなくても、18歳の就業解禁年齢になると、花街へ大量の元ミス・ハイスクールやミューズたちが家族に送金するため身を投じる。メイドやウェイトレスとして働く道もあるが、収入は一桁違う。

洋の東西を問わず、美人は皆、自分の魅力を知っている。だからこそ、自分を一番高く売ることのできるマニラの一流クラブに集まってくる。

(注：18 歳未満はマイナーあるいはアンダー・エイジと呼ばれ、花街などで働くことを厳格に禁止されている。老舗のショークラブが、マイナーを働かせていたとして閉鎖されたこともある。)

フィリピンで、恋をするならタガログ語(2013-7-12)

フィリピン通が、「フィリピンで恋をするならタガログ語を覚えなくちゃ」と語っていた(この御仁は、タガログ語、英語、スペイン語を自在に操る言葉の達人)。

フィリピンの花街には日本語をしゃべる子が沢山いるから、日本語でも何とかなってしまう。彼女たちにしてみれば商売道具の日本語を駆使し、客のハート(財布)を捕まえようとしているのだから、「フィリピンで恋をする」という感じには程遠い。それはそれでいいのだが、英語ではなぜダメなのか。

タガログで話した時のフィリピン人の打ち解けようは、他の言葉とは比較にならない

フィリピンの公用語は英語。公文書はすべて英語で、英語がわからないと会社勤めもできない。しかし英語は四角張った言葉で、恋を語るときもビジネスの交渉の様になってしまう。英語にも甘い言葉はあるだろうが、我々の実力で相手の心をとろかす芸当はできない。仮にできたとしても相手が緊張して心を閉ざしてしまう。

その点、タガログ語で迫れば、相手は自分の言葉だから初めから心を開いている。例えば片言でもタガログで話した時のフィリピン人の打ち解けようは、英語や日本語とは比較にならない。タガログ語は英語に比べ実にソフトで、フィリピン人を相手にタガログ語で返されると心がとろける。その点、英語は実にぶっきらぼうだ。

例えば「ありがとう」は、「Thank you」以外の表現がなく、感情が入り込む余地がない。しかしフィリピン人は「サラムツポ(Salamat Po)」あるいは「サンキューポ(Thank you Po)」と返してくる。この「ポ」(Po)は相手を尊敬している場合、あるいは慕っている場合などに付ける接尾語で、いかにも心地よい。

相手に質問する時「What do you want?」「Why are you so angry?」と質問したら、状況にもよるが、すでに相手を責めていることになる。メールなどではニュアンスが伝わらず喧嘩しているように聞こえる。タガログ語で「アノン グスト モ?(Anong gusto mo?=何が欲しい?)」「バケット カ ガリット?(Bakit ka gallit?=何で怒っている?)」と言っても、決して責められているようには聞こえない。

フィリピーナをからかった時、彼女たちは嫌がっていても、「フワッグ ポ(Huwag po=やめて)」と、優しく拒否してくる。

タガログ語には愛の表現がいっぱい

恋人や夫と会話する時は、初めに「マハール コ(Mahal ko、あるいは Love ko)」と呼びかけるが、直訳すれば「私の愛しい人」で、何とも甘いやり取りだ。会話やメールの最後は必ず「I love you」で閉める。「I love you」は、タガログ語会話でも重要な愛の表現のひとつとなっている。

「マハール モ バ アコ?(Mahal mo ba ako?=私のこと好き?)」という表現は、口説いている最中のカップルの間で頻繁に使われる。これを 100 回繰り返すと、相手も

降参し「マハール キタ (Mahal kita =愛してる)」と白旗をあげてくる。「Do you love me ?」と英語で繰り返しては何時までたっても埒があかない。

「美」は「ガンダ (Ganda)」で、「マガンダ カ (Maganda ka =きれいだね)」といえ
ば相手は嬉しそうに顔を赤らめる。「アン ガンダ モ (Ang ganda mo!)」と言え
ば最上級の褒め言葉で、「何てあなたは美しいの = 美しさに恋に落ちてしまう」と
の意味合いをかねる。

相手を非難する言葉として「バストス カ (Banstos ka =スケベ、下品、野卑)」
というがあるが、言い方では日本語の「イヤーン バカ」なんて感じにもなる。し
かし「プタン イナ モ (Putan ina mo =相手を非難する言葉。“お前の母さんバイタ”
という意味)」と言われたら、その恋は終わり。

不思議なことに日本語には「I love you」に相当する言葉がない。「私はあなたを
愛しています」は日本語ではない。強いて言えば「好きだ」あるいは「好きよ」だ
ろうが、実に間接的な表現だ。

タガログ語には「マハール キタ (Mahal kita)」「イニイビ キタ (Iniibi kita)」「イ
ニイロ キタ (Iniilo kita)」「グスト キタ (Gusto kita)」など、愛情表現にぴった
りの言葉が沢山ある。他にも「カイランガン キタ (Kailangan kita =あなたが欲しい)
「ダヒール サヨ (Dahil sayo =あなたのせいで)」など、恋を語る言葉が豊富にあり、
恋歌の歌詞づくりにはこと欠かない。

男と女の営みについて、英語では「セックス」とか「Make love」と実に素っ気
ない表現をするが、日本語では「H」「やる、する」など間接的表現を用い、他
には「性交」など学術的表現しかない。

タガログ語では、やはり間接的表現をするものの、「ソクソク (Soku soku これは
日本語だとフィリピーナは言うが真相は不明)」「パクワン (Pakwang スイカ)」「
ボムボム (Mom bom)」など面白い表現が沢山ある。直接的には「カンクータン
(Kankutan)」と言うが、これはかなり下品な表現らしい。

フィリピーナとの会話はタガログ語に限る。そうすれば思わぬ恋のチャンスが
巡ってくるかもしれない。

ゴミ山は宝の山?(2013-7-5)

フィリピン・パヤタスの巨大ゴミ投棄場

日本で防災を研究している方々と ADB (Asian Development Bank アジア開発銀行)
を訪問した際、「ケソン市内の北方、La Mesa (ラ・メサ) ダム貯水池に近い所に
Payatas (バランガイ・パヤタス) ゴミ投棄場があり、ゴミ投棄がひとつの産業を
形成している」という話から、「ぜひ見学したい」とのことで、今回の見学をア
レンジすることになった。

1990 年代、フィリピンを象徴するように、マニラ湾沿いのスモーキー・マ
ウンテンが様々なメディアに登場した。やがてそこが一杯になって、このパヤ
タスにゴミ投棄場が移動した。

フィリピンではゴミの焼却場は存在せず、専ら投棄に頼っている。やがてこ
こも一杯になり他に投棄場を探さなければならなくなる。昭和 30 年代、東
京湾「夢の島」に東京中のゴミが集められていたのと同じ状況だ。

約 20 年の投棄でできた巨大なゴミ山

20 年近い投棄により、現場には大きな山ができていた。投棄場に近づくとゴミの臭いがし、空気も何となく淀んでいるような気がする。周辺一帯もゴミだらけで、辺りの住宅居住者はどんな思いでこの景観を眺めているのか。新たに住む人もいないだろうから、宅地の資産価値はないような気がする。

ADB が「産業」と呼ぶのは「有用なゴミを選別し、資源回収を行なうこと」だが、要はゴミ拾いだ。

マニラ中のゴミが集まるのだから、金属、プラスチックなど大量の有用なゴミが混じっている。それを選別し（拾い集め）てリサイクル業者に販売する。だからゴミ山（「Dumping Site」と呼ばれる）の周辺はジャンク・ショップだらけだ。

個人がゴミ山から拾ってきたプラスチックなどをジャンク・ショップが買い入れ、それをリサイクル工場に持ち込み売却する仕組みになっている。

辺りはゴミ収集車と有用ゴミ回収車が走り回り、ごみ山からの悪臭の他に粉塵や排気ガスも混じり、相当劣悪な環境になっている。

残念ながらゴミ山には入れてもらえず、入口は造園がなされていた。ゴミ山でも植物が育つことを市当局は言いたいのだろう。

ゴミ山は宝の山。電気や雇用も生み出される

しかし、ケソン市あるいはバランガイ・パヤタスは、何故環境破壊の元凶のような巨大なゴミ山を受け入れたのか。

相棒ジェーンの話によると、市はここから発生するメタンガスを利用して発電しており、地域住民の電気料金は無料だそうだ。ゴミ山の御蔭で相当数の雇用が発生し、宝の山であり、バランガイとしても多いにメリットがあるそうだ。

ゴミ山の周囲の道路沿いはスコーター（Squatter 無断居住者＝貧民街）になっており、ゴミ拾い専門の人がゴミと一緒に暮らしている。ゴミは生きる糧だから、決してないがしろにはできない。

ゴミの投棄では、工学的計画がないと将来大いなる禍根を残す。つまりメタンガスの発生と地下水の汚染のことだ。

メタンガスは埋め立て後、長く発生し続けて火災を引き起こし、同時に悪臭を放つ。更にガスの発生により地盤陥没の恐れもある。そのためにはガス抜きパイプを埋め込んでおく必要がある。

ゴミを通過した雨水は地下水として周辺の土壌を汚染する。この地下水を封じ込める対策が必要だ。ADB の話では、これらの対策が何らなされておらず、将来大きな環境問題を引き起こすことになるだろうとの話だった。

そんなことはお構いなく、次から次へと車が来てはゴミを投棄し続け、山は日に日に高くなっていく。周辺の人はいえ、ゴミがあつてこそ暮らしていくための術があるわけで、決してここを離れようなどとは思わない。

フィリピンフィリピンの高級ビレッジ「アヤラ・アラバン」(2013-7-1)

生活インフラが揃う、日本人退職者に一押しのエリア

アヤラ・アラバン・ビレッジといえば、フィリピン有数の高級ビレッジとして有名。

マニラから南に 20km ほど SLEX 高速道を下り、アラバン出口あるいはフィルインベスト・コーポレートシティ出口から右に進み、2 km ほど先の左側一帯がこのビレッジだ。モンティンルパ・シティの一部で、日本の戦犯収容で有名な刑務所があつた。

「モンティンルパの夜は更けて」という歌で、団塊の世代以前の人々には懐かしい地名だろう。

ビレッジの面積は 1000 ヘクタール（1 ヘクタールは 1 万 m²）を超え、18 ホールのゴルフ場やラサール大学付属校などがある。私が企業の駐在員だった時代、都合 2 年程ビレッジに住みゴルフ場会員になっていた。名門ゴルフ場のクラブハウスは重厚で、サラリーマンの身分で金持ち気分を味わうことができた。

行けども行けども、超豪邸が並んでいた！

この日は英会話学校の体験宿泊の夫婦を案内して、フィリピンの住居、医療の現状把握の目的で、フィリピン最高級クラスの豪邸が建ち並ぶビレッジに向かった。

ビレッジの入門許可をもらうため、ここに住む日本人退職者を訪問するという話にしていた。退職者には、「ゲートのセキュリティガードから家に電話が入るから口裏を合わせてほしい」と予め頼んでいた。ところが急用で家を開けることになり、対応できないという。

それでも一か八か、運転手に住所と名前を教えて、入門許可をもらうよう交渉させてみた。入門できたが、車の中がみな日本人で相手も油断したようだ。こうしたビレッジは入門管理が大変厳重で、容易に中に入ることはできない。

ビレッジに入って、日本人の夫婦は、こんな所がフィリピンにあるのかとびっくりしていた。一軒一軒の家も超豪邸な立派さだが、行けども行けども並んでいる。

なかでも特に豪邸という家に行った。塀の外からなので残念なことにより写真が撮れなかった。しかし玄関にはフルサイズのベンツが 2 台置かれ、想像しがたい贅沢な暮らしがうかがわれた。

このビレッジにお住まいの退職者の家は、家賃 10 万ペソ（約 22 万円／月）。2 階にバス・トイレ付きの大きなベッドルームが 4 部屋ある豪邸だが、ここでは並みの家だ。庭にプールがあるのは当然のこと。

高級ビレッジの原理は簡単で、1 区画を 1000 m²以上に造成し分割を禁止する。そうすると土地だけでも 1000 万～2000 万ペソ（2500 万～5000 万円）となり、並みの金持ちでは家を建てることができない。1000 ヘクタール（1000 万 m²）のビレッジの 50%が宅地として 500 ヘクタール（500 万 m²）。それを 1000 m²で割ると 5000 区画、豪邸が 5000 軒ある計算になる。ここにはこんな豪邸が軒を連ねている。

ショッピングセンターから病院まで、生活インフラがすべて揃う

この周辺はマニラのベッドタウンとして戦後開発され、高級住宅地として日本人をはじめ多くの外国人が暮らしている。アラバン・ザポテ・ロードを挟んだ反対側一帯は BF ホームズという広大なビレッジ群だ。その住民を目当てにフェスティバル・モールやタウン・センターなど高級な買い物、食事処がある。ちょっと先へ行くと巨大な SM サウス・モールもある。

さらに SLEX 高速道路に近い所には最新鋭のエイシアン・ホスピタルがあり、ここには生活インフラのすべてが揃っている。退職者がマニラに暮らすとしたら、一押しエリアだ。

なお、アヤラ・アラバン・ビレッジに隣接するフィルインベスト・コーポレートシティはマカティ、オルティガスに次ぐ副都心として開発された。1990 年代終わり、10 棟弱の高層ビルが建設されたところでバブルがはじけ、以降手つかずだった。それも

最近、ようやく建設の槌音が聞こえはじめた。

もっとも、マカティの隣のフォートボニファシオ・グローバルシティがここ 10 年、目覚ましい発展を遂げている。そのため第 4 ～ 5 番目の副都心に地位を落としている。

2013 年 6 月 20 日

日本での介護に不安を抱いた息子と、フィリピン妻に連れられて。(2013-6-20)
99 歳と 89 歳のフィリピン移住

東北山形から、フィリピン妻の故郷に一家移住

K さんは 2004 年、私が PRA (Philippine Retirement Authority フィリピン退職庁) にいたころ退職ビザをとったが、その K さんが両親を連れて、奥さんの故郷フィリピンに永住するためやってきた。

それまで「両親の介護があるのでフィリピン移住は先の話」とのことだった。東日本大震災で、日本での両親の介護に不安を抱き、一家でフィリピン移住を決意。K さんは東北、山形県在住。

ビザ申請の準備として、事前に日本大使館で婚姻証明を取得。申請者が 1913 年生まれと知り、窓口担当者が驚嘆の声を上げた。数え年で 99 歳、もうすぐ生誕 1 世紀となるのがお父上で、お母様は 89 歳だが認知症を患っている。ともに大正生まれ。

初日の予定は NBI (National Bureau of Investigation 国家捜査局)、クリニック、銀行、PRA、日本大使館。相変わらずの渋滞の上、車の乗り降りに 20 ～ 30 分かかるため、やっとのことで回りきった。

翌日もビザ申請のほか、引越し用荷物の無税輸入手続き、お母様の銀行口座開設、ビザ取消の委任状と口座の共同名義への変更、K さんの免許証の書き換えなど予定がぎっしり。それも午後 2 時迄に終えなくてはならず、大わらわの 2 日間だった。

たった 2 日で疲労困憊するのだから、高齢の両親を伴い一家で日本から移動してきた K さんの苦労は、言葉に尽くせないものがあつた。

ビザの受取りは私が代行するのだが、事前に本人たちが PRA を訪問し受取手続きをしておかなければならない。K さん一家を連れ PRA を訪ねると、窓口のミッシェルが営業部長のノエルに連絡し、更にノエルが GM (ゼネラルマネージャー) に報告、PRA 一同が K さん一家を迎えた。恒例の記念写真撮影、恐らく PRA の高齢者ビザ取得の記録だろう。

不退転の覚悟。妻の実家で介護しながら百姓暮らし

2 日目の午前中に免許証書き換えを終え、午後、お母様のレントゲン撮り直しと銀行での通帳受け取りだけを残すところとなった。少々リラックスできたので、宿泊先のデュシタニ (Dusit Thani) ホテルで食事をするようになった。ところが K さんのフィリピン人奥さんの機嫌がよくない。

実は、当初私が K さんのため NTT ホテルを予約したが、駐車場がないことに気が付き急遽キャンセル。K さんはかつて日航ホテルだったデュシタニしか知らないといふので、そこに宿を取った。宿泊料が NTT ホテルの 5 倍するので、しっかり者の奥さんが腹を立ててしまった。

レストランのメニューを見てまたびっくり。その値段に、自分たちの分は注文しないという徹底ぶり。奥さんにとっては、当面退職金などの預金だけで生活しなければ

ならないのだから、儉約が何よりも大事なのだろう。

奥さんは、いつも義母に付き添い、甲斐甲斐しく面倒を見ている。昨今の日本では見れない光景だ。フィリピンでは年寄りの面倒を子どもが見るのは当たり前なので、両親はフィリピンで幸せな時を過ごすことができるだろう。若いジャパユキさんではこうはいかない。K さんも良い奥さんを持ったものだ。奥さんは元レントゲン技師。

奥さんの実家はマニラの北 120 キロの田舎にあり、1,5 ヘクタールのマンゴー農園と 3 ヘクタールの水田を持っている。K さんはそこで両親の介護をしながら百姓をして暮らす。まだ年金をもらうまでには数年ある。しばらくは貯金を食いつぶしていくことになるが、食べ物は豊富にあるからお金はさほど必要ない。

奥さんがフィリピンで農園を所有している好条件があったとはいえ、K さんは思い切った決断をしたと思う。日本の家は売り払い、日本に帰ることはないと言い切り、「不退転の覚悟です」と唇を引き締めて語った。

なお、父上は今年 4 月 100 歳を迎えられ、元気にフィリピン田舎暮らしを満喫されている。

フィリピンから「夢の日本」へ(2013-6-10) 離婚できないジャパユキさんの「偽装結婚」

フィリピンパブで働くための偽装結婚

日本行きの興行ビザ（タレントビザ）発給がストップして以来、若いフィリピーナにとって「夢の日本行き」は、日本人との結婚によってのみ実現されるといっても過言ではない。とはいえ、フィリピンで日本人配偶者を見つけるのは至難の技。

そのため、プロモーターの斡旋で見ず知らずの日本人と形だけの結婚をして、日本行きを目指す。これがイミテーション（Imitation 偽装）結婚だ。日本の入管もこの偽装結婚を厳しく監視し、本当に結婚生活をしているか確認のため、自宅訪問をしたりするそう。

偽装結婚の謝礼に、日本人男性には月々数万円を払う。プロモーターへの支払いを合わせると殆ど収入が見込めない。もっと稼ぐため体を売るなど、かわいそうなことになっているジャパユキさんも多い。

彼女たちは、日本のフィリピンパブなどで働き、それなりの収入を得て、貯金ができてフィリピンに帰り元の生活に戻る。故郷で「結婚」という話も出てくるだろう。しかし日本で離婚手続きをしてきても、フィリピンでもそれをしないと、結婚の経歴はそのまま残る。

プロモーターに「在日フィリピン大使館に届けたから大丈夫」と言われ安心していたら、いざ結婚しようとする、婚姻の記録が残っていて、婚姻の資格証明書が出ない事態が多発している。

離婚制度がない国での離婚手続き

従来は、離婚の事実が記載されている戸籍謄本を在比日本大使館に提出して離婚証明をもらい、それを City Civil Registry（登記所）に提出し、その証明書を最寄りの市役所に持っていけばよかった。これで市役所から NSO（National Statistic Office、国家統計局）に書類が送付され、婚姻の資格証明書が発行される迄さほどの手間ではなかった。

しかしこれすらジャパユキさんにとっては簡単とはいえない手続きで、これを怠って結婚できない羽目になっているフィリピーナも多かった。それが更に 2009 年頃、法律が改正され、安易に離婚できなくなってしまった。

カソリックの国フィリピンには離婚制度がない。いったん結婚したら、生涯有効なのだ。しかし裁判に訴え「この婚姻は無効」という判決を裁判官が出せば、婚姻は初めからなかったことになり、晴れて独身に戻れる（これを「アナルメント Annulment」という）。

こういうお国柄だから、日本に行くために結婚して、フィリピンに戻ったら離婚、などという神を冒瀆する行為が許されるはずがない。そのためか、日本で行なった離婚をフィリピンでも有効にするため、裁判所に届けて離婚が正当だという判決をもらわなければならなくなった。10 万ペソ（約 25 万円）程度の弁護士費用と、半年から 1 年半の月日がかかる。

ジャパユキさんには気の遠くなるような話だ。念願の日本行きを果たしても、本命の彼との結婚も当分お預けとなる。日本人との結婚・離婚を繰り返し、日本行きの手段にしてきたベテランのジャパユキさんにとっても頭の痛い話だ。

ジャパユキさんに規制をかける政府の目論見

かつて結婚は出生証明を持っていけば、市役所が比較的簡単に婚姻許可を出してくれた。現在は NSO から「シノマ CENOMA (Certificate of No Marriage)」という婚姻資格証明をもらわねばならなくなった。

戸籍制度がないから、出生証明と婚姻証明がすべてだったフィリピーノにとっては、これも頭の痛い問題だ。同姓同名の人間が結婚していると、その人と他人であることを証明しないとシノマが出ない。過去に婚姻歴があると、それを正式に抹消しない限りシノマは出ない。

これらの措置は、偽装結婚や重婚による日本行きのビザ取得が日常化ないし商業化している状況に、政治家が業を煮やしたものである。神聖な結婚をビザ取得の手段にすることは許されるべきではない。それをエサにジャパユキ志望の若いフィリピーナの体を弄んだり、月々の謝礼を当てにしたり、日本男児の名折れともいえる輩もいる。

かわいそうなのは当のジャパユキさんだ。必死の思いで念願の日本行きを果たし、故郷に錦を飾るまではいいが、偽装結婚に生涯縛られる羽目になってしまうかもしれない。これで政府の狙いどおり、偽装結婚による日本行きも下火になることは間違いない。

18 歳未満の雇用は一切禁止！（2013-5-27）

フィリピンの未成年者が年齢を偽って稼ぐワケ

ナイトクラブで働く未成年者。その場に居合わせれば顧客も逮捕！

マイナー（Minor）あるいはアンダーエイジ（Under Age）とは 18 歳未満の未成年者を指す。最近フィリピンでは、マイナーをめぐる外国人の逮捕・収監あるいは花街のクラブ閉鎖が相次いでいる。フィリピンでは、日本のように 20 歳ではなくて、18 歳をもって成人（Legal Age）とみなされる。

フィリピンでは 12 歳でハイスクールに入学し、16 歳で卒業する。その後大学へ進

む子どもは30%程度で、残りの70%はハイスクール止まりで働くことになる。

大半は貧しい家庭の子どもだから、一家の大切な稼ぎ手となるが、18歳未満の未成年者雇用は、花街はもちろん一般のレストランなどでも禁止されている。そのため、ハイスクールを卒業した18歳未満の未成年者が、年齢を偽って稼がざるを得ない状況がある。

フィリピンを訪れる外国人男性のトラブルの原因になるのがマイナーの女の子で、彼女たちを相手に買春をしたり、裸の写真を撮ったりすることが些細な金で可能なため、つい誘惑に負けてしまう。

それを斡旋するフィリピン人も後を絶たないが、時には斡旋したフィリピン人が警察にちくって外国人を逮捕させ、示談金をせしめるという法律を逆手に取った犯罪もまかり通っている。

たいていの場合、年齢を偽って働いているが、「知らなかった」という言い訳が効かないのが怖い。本人が外国にいて、インターネットを使った「サイバー・セックス」も同等にみなされるので要注意。

最近も、老舗の「ミス・ユニバーサル・ナイトクラブ」が警察の手入れを受け閉鎖に追い込まれた。容疑はマイナー売春ということで、クラブのフロアマネージャーなども逮捕・収監された。人身売買（最近では売春を人身売買と称する）にマイナーが加わると、保釈が認められず裁判の間も収監されたままとなる。

更に恐ろしいのは、その場に居合わせた客も共犯者として逮捕されてしまう。

ナイトクラブに遊びに行き、たまたまマイナーの女の子が年齢を偽って働いていたら、客として居合わせただけで逮捕・収監されてしまう。なんとも納得できないが、それが現実なのだ。

いくら注意しても、自分の与り知らぬところでマイナーの雇用が行なわれているからどうしようもない。フィリピンも遊びにくくなった。

ハイスクール卒業後2年間、雇用の機会を奪う政府の方針は？

フィリピンでは、殺人事件でも告訴する人間がいなければ犯罪が成立しない。これはアメリカの法律に則ったものだが、犯罪者の家族が、被害者の家族を抱きこんで、殺人事件を闇に葬ってしまうことさえ可能だ。

しかしマイナーの人身売買となると、検事は告訴がなくても起訴できる。

年齢を偽るマイナーの子は自ら望んで働いているのだから、雇用主や客を告訴するはずがない。しかし検事は独自の判断で起訴が可能で、「相手が合意したから行為に及んだ」という言い訳は用をなさない。

マイナーを雇うことは、花街の接客係ばかりでなく、レストランやメイドさえ禁止されている。通常は問題にならないが、マイナー本人が雇用主から勤務態度などを注意され、逆恨みで警察に駆け込めば、チャイルドアブ्यूズ（幼児虐待）で逮捕されてしまう。

また第三者が知って密告すると雇用主が逮捕され、マイナー自身も職を失うことになる。マイナー本人は稼ぎたくて当たり前前に年齢を偽る。フィリピンで人を雇う場合、成人であることを念入りに調査しないと、とんでもない爆弾を抱え込むことになる。

そこで疑問に思うのだが、フィリピンは貧しいといいながら、ハイスクール卒業後、大学へ進学しない70%程度の若者の就労機会を、2年間も剥奪するのが正しい政策なのだろうか。16歳ともなれば肉体的には十分大人で、大概の肉体労働は可能だ。

幼稚園や小学生程度の子どもが働かされているならともかく、日本でさえ中学卒業

後、18 歳まで働いてはいけないとしたら大問題となるだろう。

私はてっきり、18 歳未満の未成年者が花街での接客を禁止しているものと勘違いしていた。すべての職種で就労の機会を奪われているのには義憤を覚える。それが巡り巡って、外国人を思いがけない罪に陥れていることにもなっている。

政治家はマイナー保護を何か勘違いしているのではないだろうか。若者の雇用の機会を奪い、年齢を偽って働かざるを得ないようにし、挙句の果て雇用主を処罰するなど、無用な犯罪を誘発しているとしか思えない。

フィリピン流交渉術(2013-5-21)

「損害は金のある者に負担させよ！」から逃れるには？

警官から「被害者にさっさと金を払っておしまいにしろ」と言われ……

打ち合わせを終え別れた直後の B さんから電話。エルミタのホテル前でタクシーから降りようとドアを開けたところ、後ろから来た車がドアにぶつかり、大きく傷をつけてしまった。警察に通報すると、やってきた警官から「被害者にさっさと金を払ってお終いにしろ」とのこと。

私の相棒ジェーンに事情を説明した後、現場に駆けつけると、2 人の警官と被害者（これも警官だった）に囲まれた B さんが、「被害者の車の修理に 1 万 5000 ペソ（約 3 万 8000 円）、タクシーの修理に 1 万ペソ（約 2 万 5000 円）、合計 2 万 5000 ペソ（約 6 万 3000 円）支払え」と、寄ってたかって責められている。

被害者の車にはたしかに大きな傷がある。まず誰に責任があるのかを明らかにして、ポリスレポートを作成し、それに基づき後日示談で話をつけようと主張した。しかし警官たちは「そんなことをしても時間の無駄だ」と取り合わない。フィリピーノの相棒が来るからと話しても、一体いつまで待たせる気かと、執拗に支払いを迫る。

そのうち、ジェーンが国家警察幹部の旦那を伴ってやってきた。これでもう安心だ。それまで強気一辺倒だった警官が、国家警察の幹部を見たたん、ニコニコ顔で「何とかお金を払ってもらえませんか」という態度に豹変した。

「乗客が不用意にドアを開け後続車に損害を与えたのはタクシードライバーの注意義務怠慢で、責任の大半はドライバーにある。従って乗客に支払い義務はない」というのが話し合いの結論だった。しかし被害者の警官は、「B さんが支払いの意志を示している」と主張した。

B さんとしては、パスポートで名前を控えられている以上、後でトラブルになっても困る。「ドライバーに金がないなら、この場を収めるには自分が出すしかない」という。「それならいくら支払う用意があるのか」と訊くと 1 万ペソとのことだった。

示談となるとジェーンの出番で、被害者の警官はすぐに OK した。そうになると、今度はタクシードライバーが黙っていない。「自分の車も傷がついたから俺にも払え」といつて聞かない。自分の過失のはずなのだが、「B さんが支払ったということは自分の過失を認めたのだから、タクシーの損害に対しても賠償しろ」という。

ジェーンは腹を立てて、「そんなことをいうなら 1 万ペソの話はなかったことにする」と、被害者の警官からお金を取り上げてしまった。

そこで慌てたのが警官たちだ。ドライバーを逮捕しても一銭の得にもならず、国家警察幹部の前でごたごたすると顔が潰れる。結局、ご託を並べるドライバーをタクシーに押し込んで黙らせ、一件落着。B さんは、1 万ペソでケリが付いたのでほっとした様子だった。

金がある者に損害を負担させるのがフィリピン流

この日はたまたま日曜日で、ジェーンの旦那が休みで大変ラッキーだった。そうであれば、法律上は責任がなくても、不用意にドアを開けた B さんがある程度の金銭を支払って終わりにするしか方法はない。

支払能力ある人間からお金を払ってもらわない限り修理代は出ないから、被害者（警官）と駆けつけた警官が、金のないタクシー運転手を無視して B さんを責めまくる。これがフィリピン流。

帰りの車中で国家警察幹部の旦那は、「正義を守るはずの警官がこんなことでとても恥ずかしい。申し訳ない」と B さんに頭を下げた。日本であれば、ドライバーの責任で乗客にお咎めはないはずだ。金がある者に損害を負担させるというのは、日本では理屈が通らない。

今回は力強い助っ人がいたからよかったが、不慣れな外国人がこんな目に遭ったらどうしたらいいのだろうか。

腹を立てて警官を怒鳴りつければ、事態は益々ややこしくなる。「大使館に連絡したから、大使館員が来るまで少し待ってくれ」と時間を稼ぎつつ、少しでも少額ですむよう交渉するしかないだろう。交渉事に通じた友人（できればフィリピン人）がいれば、助けを求めるに越したことはない。

フィリピン「疎開」のすすめ(2013-5-7)

子どもを国際人に育てたいならフィリピンへ！

英語水準の高さに魅かれ、韓国親子が続々留学

最近、日本経済のグローバル化、放射能汚染の恐怖、学校でのいじめ自殺などで、日本での教育に見切りをつけ、お子さんを海外で学ばせようとするお母さんが増えていく。英語を堪能に話す国際人に育つ一方、放射能やいじめから「疎開」できるという一石二鳥。

留学といえばアメリカやヨーロッパが定番だが、これは余程の金持ちだけができる特権だ。2000 年代、韓国のお母さんたちが子どもの留学先として目をつけたのがフィリピン。

韓国ママの教育熱心は尋常ではなく、大手企業への就職も真つ当な努力ではまならない。超優良企業サムソンは TOEIC 900 点以上でないと玄関払いになる。一時、フィリピンには語学専門学校も含め 8 万人の留学生がいた。2005 年当時、PRA（フィリピン退職庁）にも小さな子ども連れの韓国ママが退職ビザの申請に列をなしていた。

フィリピンでは国語と社会を除いて小学校から授業はすべて英語。英語の授業はもちろん英語だが（日本では英語の授業もほとんど日本語）、数学や理科も英語。だからフィリピン人は、ハイスクール（日本の中学校相当だが現状 4 年間）を終える頃には、みな英語に堪能なバイリンガルに育つ。

韓国ママは、小さい子はインターナショナル・スクールに通わせ、年長の子は英会話学校で英語の特訓を受けさせる。フィリピンには英語の先生は掃いて捨てるほどいるから、時給数百円というタダみたいなお金でいくらでも雇える。生活費も本国で暮らすよりかえって安い。小さい子どもは母親連れで留学し、旦那は本国で稼いでせつせと仕送りする。

こうやって国際人を養成してきた韓国に、日本は水を空けられようとしている。日本で内向きに暮らす若者は世界で太刀打ちできなくなっている。日本企業も多くの外国人を雇いはじめ、日本人の就職戦線は益々厳しいものになっている。

留学生用のスクールを併設する大学も

あなたの子どもが日本語と英語をネイティブとして流暢に使いこなすことができ、色々な国籍の友人を持っているとしたらどうだろう。企業からは引く手あまたに違いない。

マニラの大学付属のインターナショナル・スクールは、大学より金になると、海外の留学生用スクールを併設しているが、この様な大学は増加している。

フィリピンでは最近、学校制度が変更され、今年ハイスクールに入学する生徒から、従来は4年で卒業が、4年+2年で大学へ進学とになり、日本と同じになる。

これまでフィリピンのハイスクールを卒業しても、日本の大学進学資格はなかった。しかし4年後には、すべて国際標準となり、フィリピンのハイスクールを卒業すれば日本の大学進学資格が与えられる。インターナショナル・スクールは外国の大学進学を前提としているから、現状でもハイスクールを卒業すれば、日本その他の国の大学に進学する資格が得られる。

フィリピンの学校の種類は、公立（学費無料）、私立（学費は有料で年間2万ペソから10万ペソ程度、1ペソ=約2円）、それにインターナショナル・スクール（学費は年間10万~20万ペソ、中には80万ペソのところもある）がある。大多数のフィリピン人は公立学校に通うが、金持ちは私立だ。有名私立の子どもたちはみな有名大学へ進み、社会に出ても学校時代に培ったコネで社会の上層部を形成する。

フィリピンの大学の雄、フィリピン大学（UP）は公立だが、ほとんどの学生が私立ハイスクール出身で、エリート教育を受けてきた子弟だ。貧乏人が小中高と公立で学び、東大に入学し高級官僚や企業の幹部になる構図はフィリピンにはない。金=教育=出世=金の循環だ。

インターナショナル・スクールは基本的に外国人子弟を対象にしているが、金持ちのフィリピン人も通っている。特に母親がフィリピン人で父親が日本人（あるいはその他の外国人）の場合、ここに通わせることが多い。インターナショナル・スクールは私立校の上を行くエリート校だ。

2万ドルの退職ビザで親子留学

日本人子弟が留学してフィリピンの学校に通うことを想定したらどうなるだろう。

小学校入学前、あるいはその前後だったら、万能細胞の子どもはすぐにアジャストして問題ない。しかしフィリピンの授業はほとんどが英語で行なわれるので、小学校も高学年になると、英語が達者でないと授業についていけない。ハイスクールともなれば、ほとんどアメリカ人と同等の英語力を有しているのでキャッチアップ Catchup はまず不可能。

インターナショナル・スクールの場合、授業は英語だが、新規にフィリピンに来た生徒は必ずしも英語が達者ではないので、マンツーマンの補習授業を十分な語学力がつくまでやってくれる。子どもは学習能力が優れているので、数カ月で通常のクラスに編入できる子も多い。

フィリピンには大小様々なインターナショナル・スクールがあり、学費が一般の私

立校に比べ高いだけに良好な教育環境を提供してくれる。新規にやってきた子どもは、そんな事情からインターナショナル・スクールに入学させるのがいい。

入学手続きに必要なのは日本の学校の成績表とフィリピンに滞在する資格（フィリピン国籍か就学ビザなど）、あとは簡単な面接と入学申込書の提出だけだ。

ビザについては、親が退職ビザを取得し、子どもが同伴者となる手がある。退職ビザの同伴者は就学ビザが免除されるという特典がある。母親と子どもがフィリピンで暮らす場合に最適だ。父親は必ずしもフィリピンに住む必要はないが、預託金として2万ドルの定期預金をフィリピンの銀行口座に作る必要があり、親は35歳以上でなければならない。

この2万ドルは将来ビザを取り消せば、引き出せる利子の付く単なる預金だ。同伴者は2名なので、母親と子ども2人のビザがもらえる。3人目の子どものビザも取るなら追加で1万5000ドルの預託金が必要となる。年会費は同伴者2人まで360ドル、3人目からは1人につき100ドル追加となる。

放射能汚染を逃れ、母子でフィリピン移住(2013-4-25)

3組の親子の初めてのマニラ体験！

すべては子どもの健康と将来のため

日本から3組の母と子どもたちが退職ビザ取得のためフィリピンを訪問した。総勢8名の母子疎開だ。目的は「放射能汚染が蔓延する日本に、住む場所はない」と語る。

到着早々、全員が初めてのフィリピン訪問だと聞き、勇気と決意に驚いた。何の予備知識もない国、それも3Kの悪名高いフィリピンで永住も厭わないという。すべては子どもの健康と将来のためだ。

5人のお子さん連れ、総勢8名の健康診断や銀行口座開設手続きなどの申請準備に、予想外の時間がかかった。どこかを訪問するたび、おしっこでトイレ探しに追われ、喉が渴いたとミネラルウォーターの調達に走らなければならない。

到着日の午後は書類の準備と健康診断、そしてPRA（フィリピン退職庁）のパーティに参加。翌日は終日マニラ見物。3日目は銀行手続きとビザ申請、モール・オブ・エイシア訪問と、連日夜10時すぎまでの強行軍だった。

マニラ見物の最初の訪問先は、ラスピニャスのサウスビラ・インターナショナル・スクール。母子疎開の先輩の案内で、子どもの教育環境とオハナ・コンドやイリジウムなどの住宅環境を視察。先輩の勧めで、SMサウスモールのMary Graceイタリアン・レストランで昼食。洒落た店構えは日本のレストランに勝るとも劣らず、値段は半分以上とお母さんたちは大満足。

次に向かったのが、フォートボニファシオ・グローバルシティとアメリカンセメタリー。広々とした芝生に子どもたちは大はしゃぎ。そしてマニラ・インターナショナル・スクールや日本人学校の立派さにびっくり。インターナショナル・スクールの学費、年間160万円には溜息をつく。

彼女たちは、放射能汚染で住めなくなった日本を逃げ出す一般庶民だから、企業の援助でこのような学校に通う駐在員子女とは事情が違う。将来、主人も日本に住めなくなると生活の糧を失ってしまうリスクもあるから、財布の紐は固い。フィリピンで外国生活をエンジョイしようなんて気はなく、サバイバルの気概を持っている。

フィリピン生活の現状に一喜一憂

参加者の一人がクリスチャンで、イントラムロスやチャイナタウンの教会群に興味を持たれた。世界遺産のサンアガスティン教会ではちょうど結婚式をやっていた。この街は歴史地区とはいえ、人々が生活する生きた街だ。マプア工科大学などの大学が並ぶ一角は、平日のため学生が溢れていた。

フィリピン近代史の英雄、先代のアキノ元大統領の葬式が行なわれたのがクリスチャンの総本山、マニラ大聖堂。中には入れなかったが、遠くから記念撮影。

次に向ったのがチャイナタウン。その一角のビノンド教会は天井の絵画が有名で、なかなかユニークで見ごたえがある。

キアポ教会周辺の人の洪水にはさすがに緊張、母親は子どもたちの手を固く握り締める。辺りをうろつく野良犬に恐怖感を覚えるのは、フィリピンの犬がみな狂犬病にかかっていると信じているから。一方で一山 5 ペソ、10 ペソで売っている野菜に、「これなら生活していける」と確信する。

この辺りですでに暗くなりかけていたので、世界遺産サンセバスチャン教会は割愛し、本日のフィナーレ、マカティのアヤラ・トライアングルの電飾ショーに向かった。

クリスマスの時期で、マカティの渋滞は半端ではない。かなり時間がかかり、5 歳の R 君は居眠りをしてしまった。アヤラ・トライアングルの地下駐車場で R 君をママが抱きかかえると、お漏らし。慌ててトイレを探し回る。

エレベーターで上がり外に出ると、まさに電飾ショーが始まったところ。クリスマスソングにあわせ公園の木々に取り付けられた電飾が点灯する様子に、みな感激。

8 時を回っていたが、食欲なママたちは更に大型ショッピングモール、グリーンベルトに繰り出す。一回りして、名古屋から出店している MA MAISON のトンカツを試食。フィリピンに来てまで日本のトンカツを食べることはなかりと躊躇していたが、食材が日本からのものではないことを確認して OK となった。

唯一日本から持ってきているソース等には、皆さん手をつけなかった。ジャパニーズ・ライスの表示に敏感に反応していたが、一口食べて、「こんなまずいご飯が日本から来ているはずがない」と確信し、安心して口に運んでいた。

そこのトイレで見つけたのがモール・オブ・エイシアで、和民（わたみ）が開店したお知らせ。いずれ試しに食べてみたいと思う。和民（カズタミ）は私の本名。

放射能を気にせず、屋外で食事ができる！

翌日、PRA でのビザ申請を無事に終え、モール・オブ・エイシアに向った。まずはトイレ探し。そして花火があがるマニラ湾側に急ぐ。途中スケートリンクを見て、「なんで？」と思わず絶句。広大なモールに溢れかえる人を見て「日本よりも都会じゃん」と声を唸らせていた。

花火見物を満喫して食事。屋内に 9 人が座れる席がなく外のテーブルに座ったが、決して暑くはなく快適。

ビール好きの皆さんと乾杯。「今時、放射能を浴びる心配もなく屋外で食事ができるのが嬉しい」との感想。東北や関東から来たわけではないが、「いずれ瓦礫の焼却などで全国に放射能汚染が広がり、日本中が放射能汚染地域になる」と信じている。

モール・オブ・エイシアは全面的にクリスマスの装飾が施され、若者たちが闊歩している。